

## **Oracle® Data Relationship Management**

*Oracle® Data Relationship Steward*

*Oracle® Data Relationship Management for Oracle Hyperion Enterprise Planning Suite*

*Oracle® Data Relationship Management for Oracle Hyperion Financial Close Suite*

*Oracle® Data Relationship Management Read Only Access*

*Oracle® Data Relationship Governance*

### **Installation Guide**

リリース 11.1.2.3

### Data Relationship Management Installation Guide, 11.1.2.3

Copyright © 1999, 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

ドキュメントのアクセシビリティについて .....	7
<b>第 1 章 Data Relationship Management のインストール .....</b>	<b>9</b>
インストールの前提条件 .....	9
アーキテクチャ・オプション .....	10
64 ビットのオペレーティング・システム .....	15
Windows Server 2008 の前提条件 .....	15
Oracle Database の前提条件 .....	16
SQL Server データベースの前提条件 .....	16
アジア系グリフの PDF フォントの要件 .....	17
その他の資料 .....	17
ミドルウェア・ホームおよび EPM Oracle ホームについて .....	17
Foundation Services .....	18
Data Relationship Management CSS ブリッジ .....	19
Data Relationship Management および Foundation Services の配置シナリオ .....	19
Data Relationship Management のインストール .....	20
分散環境での Data Relationship Management のインストール .....	21
セカンダリ・エンジン・ホストのインストール .....	21
セカンダリ Data Relationship Management Web サーバー・ホストのインストール .....	22
セカンダリ API アダプタ・ホストのインストール .....	22
セカンダリ Foundation Services ホストのインストール .....	22
トラブルシューティング .....	22
<b>第 2 章 Data Relationship Management の構成 .....</b>	<b>23</b>
Data Relationship Management 用の Foundation Services の構成 .....	23
セカンダリ Foundation Services ホストの構成 .....	24
外部プロバイダでの Shared Services の構成 .....	25
シングル・サインオン用の Shared Services の構成 .....	25
Data Relationship Management 用の CSS モードの構成 .....	25
Data Relationship Management 構成コンソールの起動 .....	25
Data Relationship Management アプリケーションの構成 .....	25

アプリケーションの作成	26
アプリケーション・コントローラ	26
アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定	27
日付、時間および数値のフォーマット	27
リポジトリの作成	28
ホスト・コンピュータの構成	33
認証設定の構成	37
EPM レジストリ設定の構成	38
アプリケーションの削除	38
構成設定の保存およびサービスの開始	39
Web ブラウザでの Data Relationship Management の起動	39
Internet Explorer での互換表示モードの無効化	39
移行ユーティリティの構成	40
アップロード・ファイル・サイズの増加	40
Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシング	41
Data Relationship Management でのシングル・サインオンの使用	42
Web アクセス管理	43
Web サーバーでの SSL の停止	44
Web クライアント・ヘルプの構成	44
<b>第 3 章 Data Relationship Management Web サービス API の配置および構成</b>	<b>47</b>
システム要件	47
配置の前提条件	48
Foundation Services のインストールおよび構成	48
Oracle Web Services Manager 用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール	48
Oracle Web Services Manager の構成	48
外部プロバイダでの WebLogic の構成	49
API アダプタの構成	49
Web サービス・アプリケーションの配置	49
Data Relationship Management Web サービスの保護	50
Oracle Web Services Manager でのポリシーの構成	50
SSL 用の Data Relationship Management API アダプタの構成(オプション)	51
Oracle Enterprise Manager を使用した Data Relationship Management Web サービスのテスト	52
トラブルシューティング	53
<b>第 4 章 Data Relationship Management インストールのアップグレード</b>	<b>55</b>
サポートされるアップグレード・パス	55

9.2.x、9.3.x および 11.1.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス .....	56
11.1.2.0.x および 11.1.2.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス .....	56
11.1.2.2 のリポジトリ・コピー・パス .....	56
アップグレード・チェックリスト .....	57
既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード .....	58
データ分析 .....	62
外部接続の使用 .....	63
データ変換 .....	65
アプリケーションへの更新の適用 .....	68
手動アップグレード・タスク .....	69
派生プロパティ参照によるプロパティのアップグレード .....	69
バッチ・クライアント・スクリプトのアップグレード .....	69
API プログラムのアップグレード .....	69
<b>第 5 章 Data Relationship Management アプリケーションの監視 .....</b>	<b>71</b>



---

# ドキュメントのアクセシビリティについて

---

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

## Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。





# 1

## Data Relationship Managementのインストール

### この章の内容

インストールの前提条件.....	9
その他の資料.....	17
ミドルウェア・ホームおよび EPM Oracle ホームについて .....	17
Foundation Services .....	18
Data Relationship Management のインストール.....	20
分散環境での Data Relationship Management のインストール .....	21
トラブルシューティング.....	22

## インストールの前提条件

チェックする項目:

- Oracle Data Relationship Management は、管理者としてログインしているユーザーがインストールする必要があります。
- 目的のホスト・コンピュータが、最小システム要件以上を満たしています。

**注：** 動作保証されたバージョンのプラットフォーム・コンポーネントの詳細は、[http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion\\_certification.html](http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html)にある Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックスを参照してください。

- データベース・サーバーがインストールされ、データベース・コンピュータ上で稼働しています。
- Internet Information Services (IIS)がインストールされ、Web サーバー上で稼働しています。
- 次のアクションを実行できるユーザー・アカウントがアプリケーション・サーバーで使用可能です:
  - レジストリ設定を編集
  - ローカル・ファイル・システムを対象とした読取りおよび書込み
  - プロセスを起動
  - サービスとして実行

詳細は、次を参照してください:

- [アーキテクチャ・オプション](#)

- 64 ビットのオペレーティング・システム
- Windows Server 2008 の前提条件
- Oracle Database の前提条件
- SQL Server データベースの前提条件
- アジア系グリフの PDF フォントの要件

## アーキテクチャ・オプション

次の各図は、Data Relationship Management の様々な構成シナリオを示しています。

図 1 Data Relationship Management のアーキテクチャ

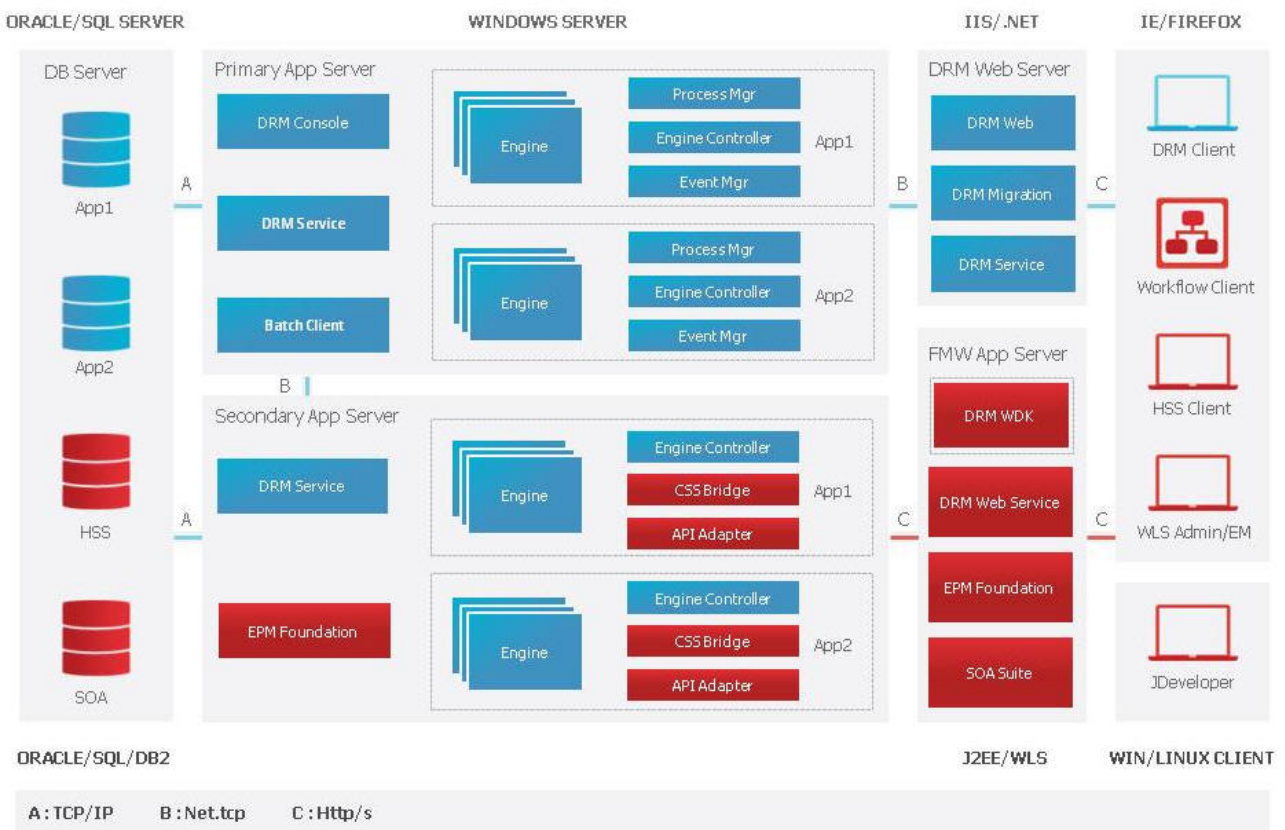


図 2 複数のアプリケーションを使用した Data Relationship Management

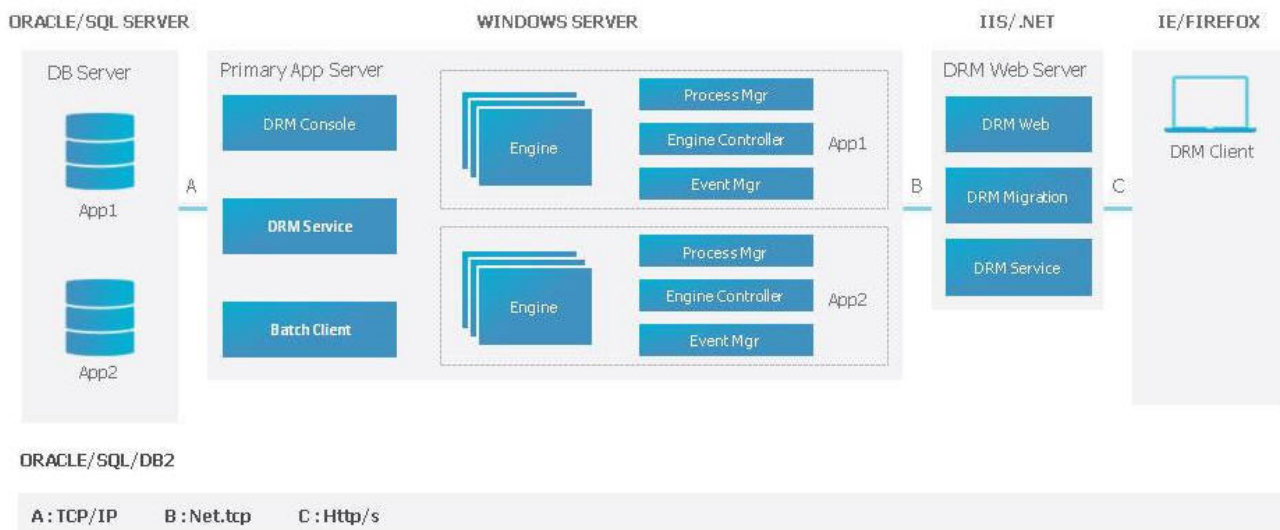


図 3 複数のアプリケーション・サーバーを使用した Data Relationship Management

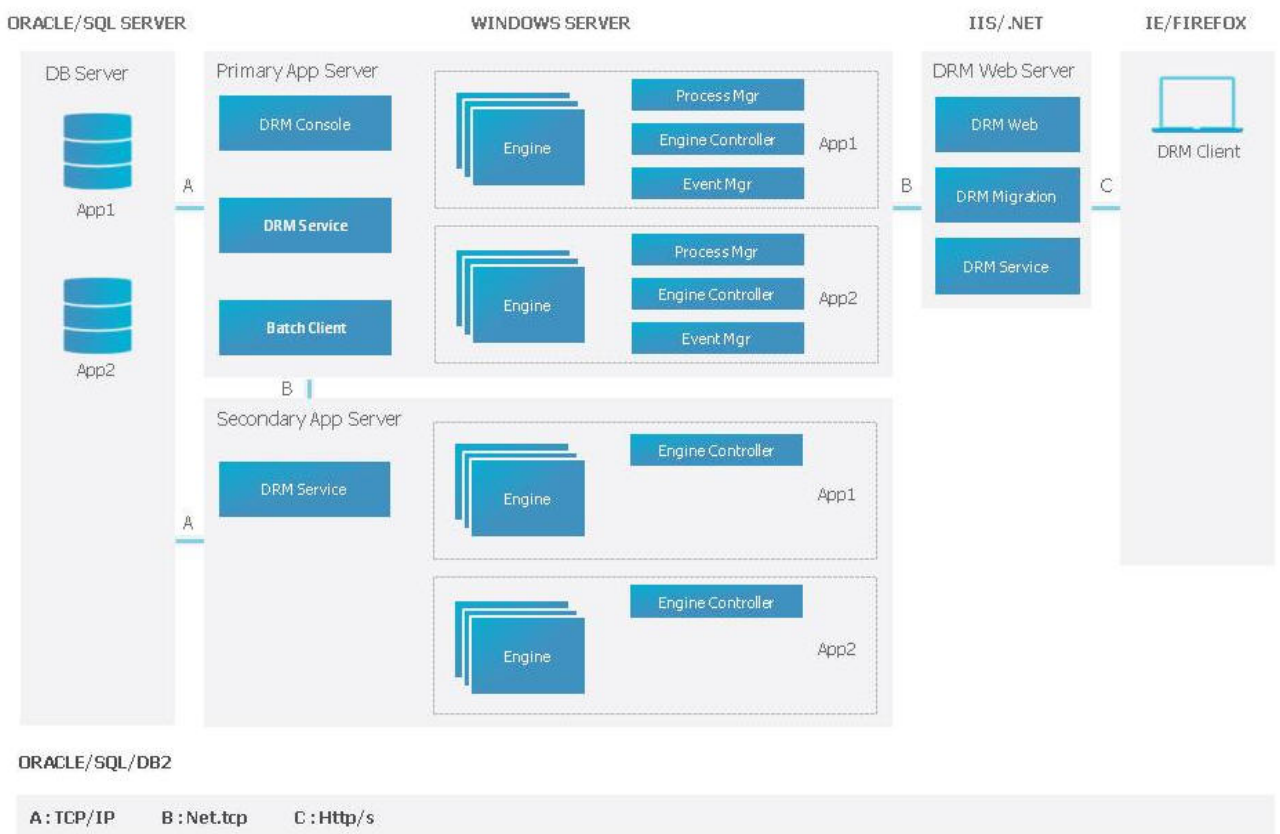


図 4 外部認証を使用した Data Relationship Management

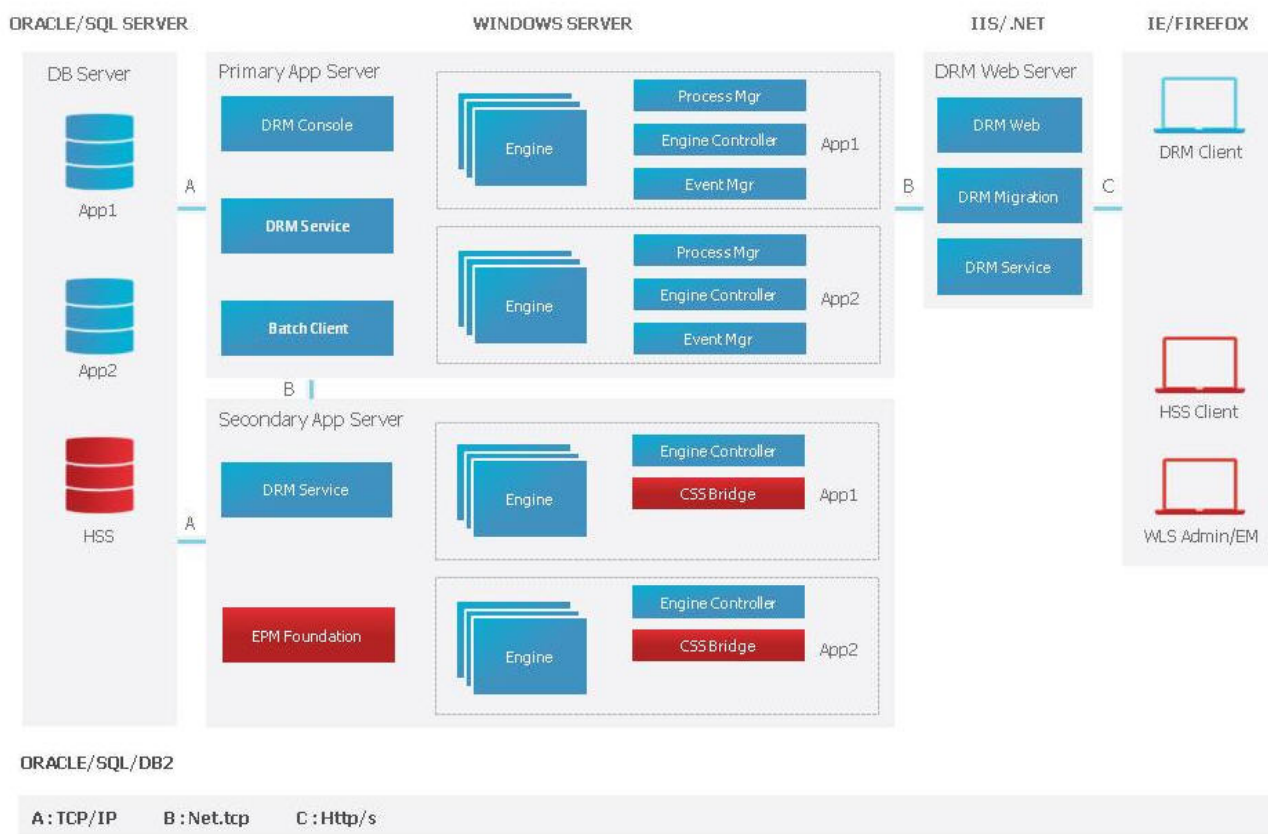


図 5 EPM Foundation を使用した Data Relationship Management

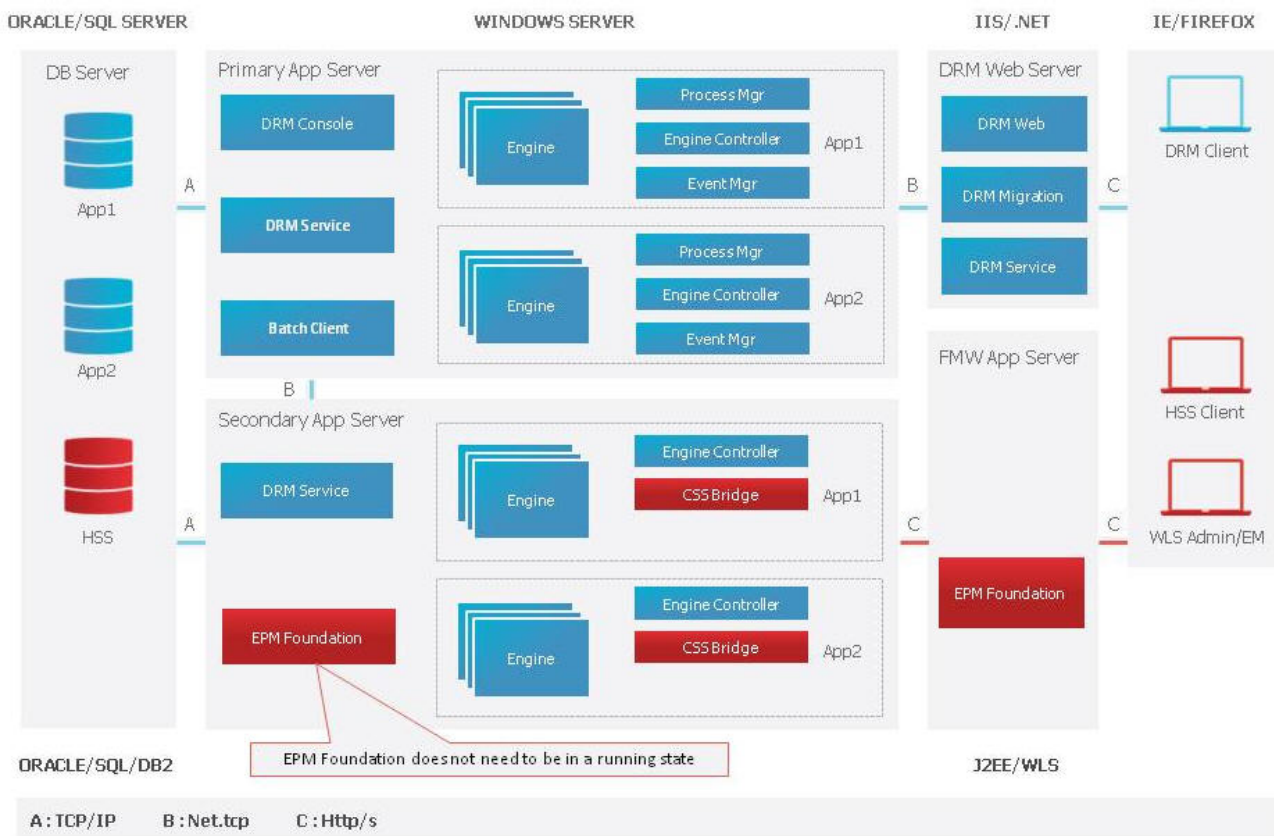


図 6 Web サービス統合を使用した Data Relationship Management

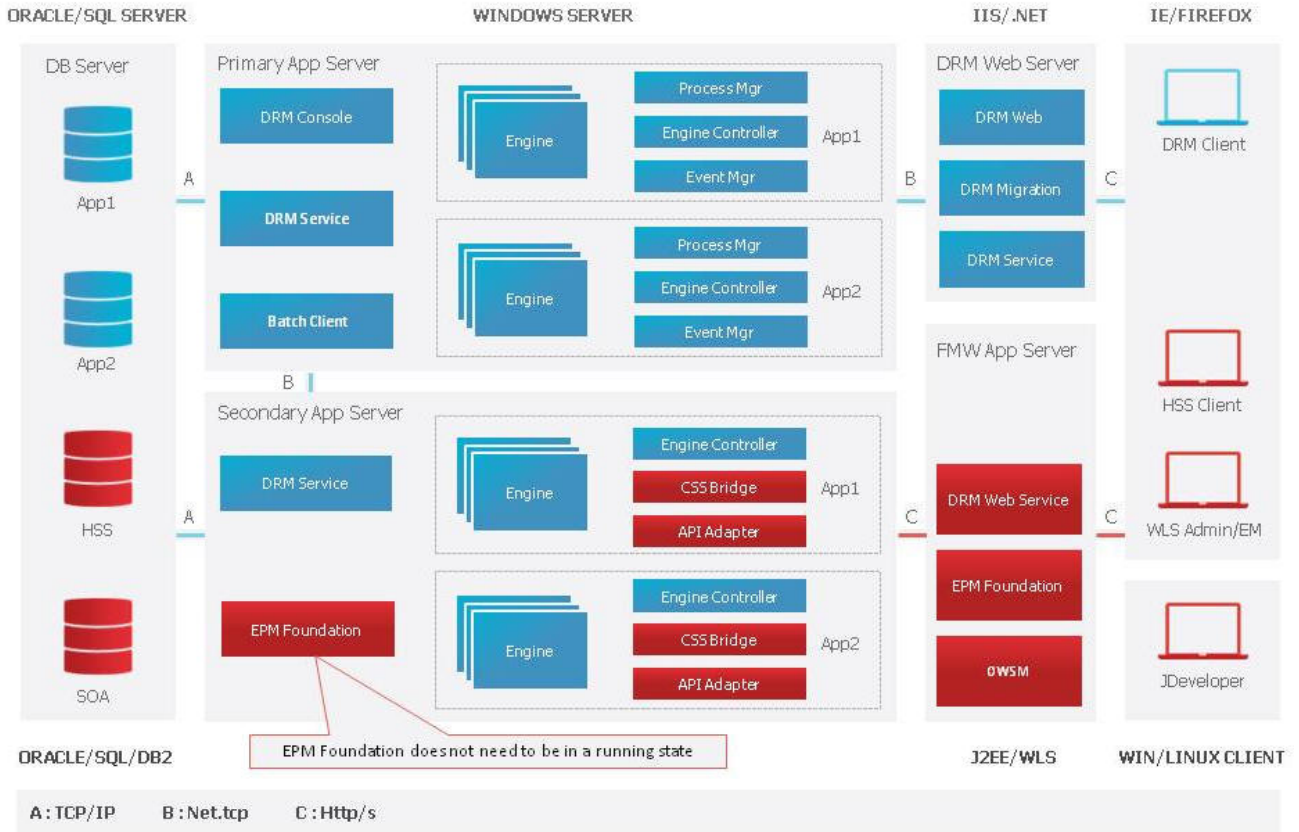
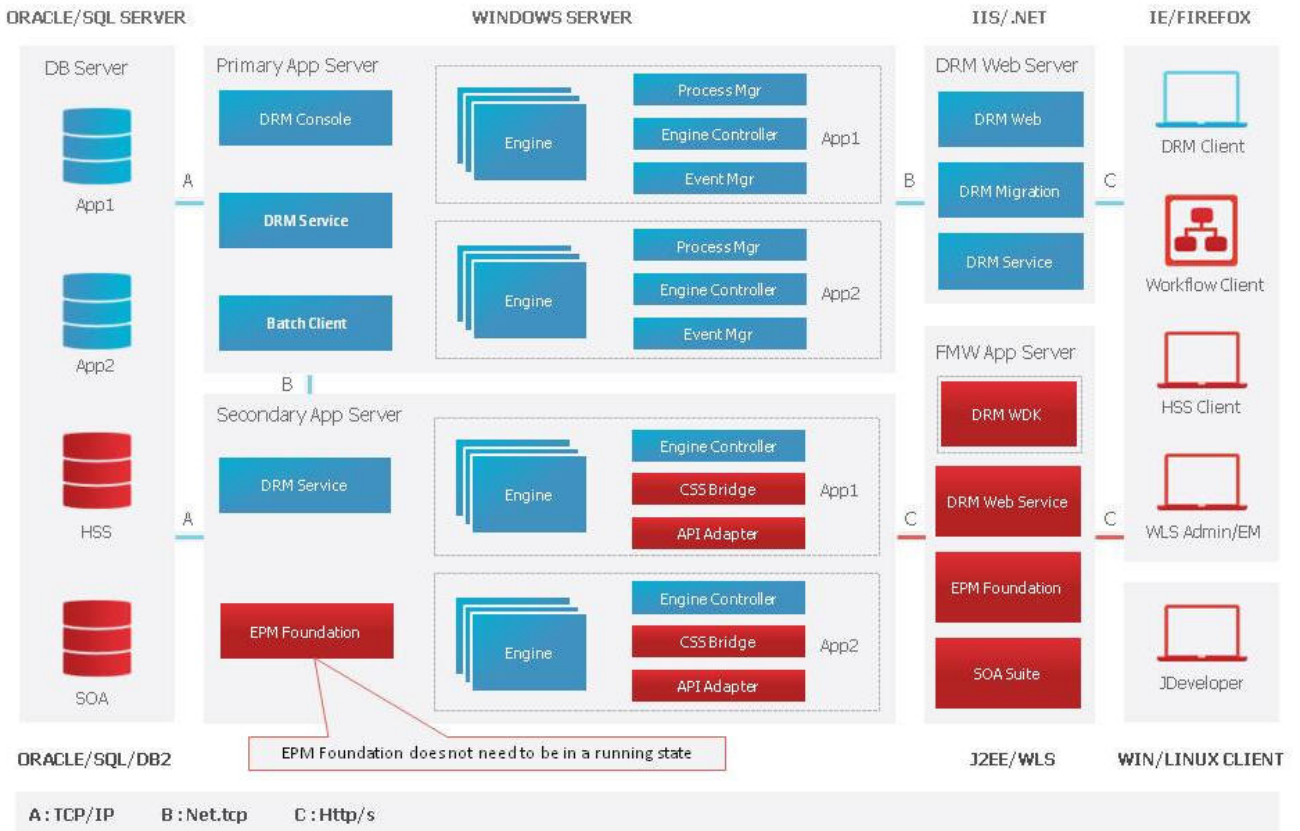




図7 ワークフロー開発キットを使用した Data Relationship Management



## 64 ビットのオペレーティング・システム

64 ビットのオペレーティング・システム(Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition など)を使用する場合、Data Relationship Management をインストールする前に、最初に 64 ビット・バージョンの .NET Framework 3.5 SP1 をインストールする必要があります。

## Windows Server 2008 の前提条件

Microsoft Windows Server 2008 上にインストールする場合、管理コンソールから .NET Framework 3.5 SP1 をインストールする必要があります。

▶ .NET Framework 3.5 SP1 をインストールするには:

- 1 「スタート」メニューから、「すべてのプログラム」、「管理ツール」、「サーバーマネージャー」の順にクリックします。
- 2 左側のツリーで、「機能」をクリックします。
- 3 右側にある「機能の追加」リンクをクリックします。
- 4 「.NET Framework 3.5.1 機能」オプションを選択します。
- 5 「次」をクリックします。
- 6 「インストール」をクリックします。

7 インストールが完了したら、「閉じる」をクリックします。

## Oracle Database の前提条件

- Oracle RAC データベース・システムを使用している場合、インストールの前に、適切な RDBMS ソフトウェアでテーブルスペースを作成する必要があります。
- スクリプトの実行を自動で行うか手動で行うかにかかわらず、ユーザーは SYSTEM としてログインする必要があります。データベース・スクリプトを手動で実行すると、リポジトリ・ウィザードの Data Relationship Management データベース接続で指定したユーザー ID が、RDBMS に作成されます(まだ存在していない場合)。ユーザーは、DRM\_DATA のデフォルト・テーブルスペースに割り当てられますが、次のアイテムに対するアクセス権を持っている必要があります：
  - デフォルト・テーブルスペース(通常は DRM\_DATA)
  - UNLIMITED TABLESPACE
  - CONNECT
  - CREATE ANY SEQUENCE
  - CREATE USER
  - ALTER USER
- データベース・スクリプトを手動で実行すると、ユーザーは、DRM\_DATA のデフォルト・テーブルスペースを含むスキーマ所有者としてログインします。このユーザーは、次のアイテムに対するアクセス権を持っている必要があります：
  - デフォルト・テーブルスペース(通常は DRM\_DATA) - テーブルスペースが作成されていない場合、これはインストール後に実行できます。
  - UNLIMITED TABLESPACE
  - DBA
  - CONNECT
  - CREATE ANY SEQUENCE
  - CREATE USER
  - ALTER USER

**注：** スキーマ所有者の名前はインストール・プロセス中に変更できます。

## SQL Server データベースの前提条件

- SQL Server クラスタ・データベース・システムを使用している場合、インストールの前に、適切な RDBMS ソフトウェアでデータベースを作成する必要があります。



- Data Relationship Management データベース接続に指定されているユーザー ID をインストールの前に手動で作成する場合、そのユーザーを Data Relationship Management データベースのデータベース所有者にすることが重要です。

## アジア系グリフの PDF フォントの要件

ダウンロードした PDF ファイルでアジア系グリフを表示可能にするには、Arial Unicode MS フォントを Web サーバーにインストールする必要があります。

## その他の資料

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System のインストール・ドキュメントは、Oracle Technology Network の [Oracle Documentation Library](#) にあります。Data Relationship Management をインストールして構成する場合、次のドキュメントが役立ちます:

- Oracle Enterprise Performance Management System Installation Start Here
- Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide
- Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide
- Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide
- Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide

## ミドルウェア・ホームおよび EPM Oracle ホームについて

### ミドルウェア・ホーム

ミドルウェア・ホームは、Oracle WebLogic Server ホーム、および必要に応じて 1 つ以上の Oracle ホーム(EPM Oracle ホームを含む)で構成されています。ミドルウェア・ホームは、ローカルのファイル・システム上またはネットワーク・ファイル・システム(NFS)を介してアクセス可能なリモートの共有ディスク上に設定できます。

ミドルウェア・ホームの場所は、コンピュータへの最初の製品インストール中に定義されます。コンピュータへのその後のインストールには、前に定義された場所が使用されます。デフォルトのインストール・ディレクトリは Oracle/Middleware です。ミドルウェア・ホームの場所は、このドキュメント全体を通して MIDDLEWARE\_HOME と呼びます。

### EPM Oracle ホーム

Oracle ホームには、特定の製品をホストするのに必要なインストール・ファイルが含まれます。Oracle ホームは、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内に

あります。EPM Oracle ホームには EPM System 製品用のファイルが含まれています。

EPM System 製品のコンポーネントは、ミドルウェア・ホーム下の EPM Oracle ホームにインストールされます。デフォルトの EPM Oracle ホームの場所は `MIDDLEWARE_HOME/EPMSys11R1` です。さらに、製品が使用する共通内部コンポーネントが EPM Oracle ホームにインストールされます。マシン上にインストールするすべての製品に対して十分なディスク・スペースがこの場所にあることを確認し、慎重に場所を選択します。この場所は変更できません。

EPM Oracle ホームの場所は `EPM_ORACLE_HOME` というシステム環境変数で定義されています。このドキュメント全体を通して、EPM Oracle ホームの場所を `EPM_ORACLE_HOME` と呼びます。

## Foundation Services

次のオプション機能を使用する場合、Data Relationship Management では、Oracle Hyperion Foundation Services をインストールする必要があります:

- LDAP などの外部ユーザー・ディレクトリでのユーザー認証
- Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシング
- Data Relationship Management でのシングル・サインオンの使用
- E-Business Suite および Fusion Accounting Hub 用の Oracle General Ledger との統合
- Oracle Hyperion EPM Architect との統合
- Data Relationship Management Web サービスを使用した API プログラムおよび SOA ベースのプロセス

Foundation Services のインストールには、これらのコンポーネントを Data Relationship Management に対して有効化するために構成する必要がある次のコンポーネントが含まれます:

- Oracle WebLogic Server
- Oracle HTTP Server
- Oracle Web Services Manager
- Oracle Hyperion Shared Services

Foundation Services は、EPM System インストーラを使用してインストールされます。Foundation Services のインストールおよび構成プロセスは、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide に記載されています。

詳細は、次を参照してください:

- [Data Relationship Management CSS ブリッジ](#)
- [Data Relationship Management および Foundation Services の配置シナリオ](#)

## Data Relationship Management CSS ブリッジ

Data Relationship Management CSS ブリッジは、Shared Services と通信するために使用し、Foundation Services を Data Relationship Management とともに使用する場合にインストールする必要があります。次の情報および要件は、Data Relationship Management CSS ブリッジを理解するために重要です。図 4 も確認してください。

- CSS ブリッジ・コンポーネントは、Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・インストール・コンポーネントに付属します。
- CSS ブリッジは、サポートされる Microsoft Windows コンピュータ上で実行する必要があります。
- 指定された CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータが Data Relationship Management アプリケーション・コントローラではない場合:
  - CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータに Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・コンポーネントをインストールする必要があります。
- CSS ブリッジが実行されるコンピュータに Foundation Services をインストールして配置する必要があります。

## Data Relationship Management および Foundation Services の配置シナリオ

Foundation Services を使用した Data Relationship Management の詳細は、図 5 を参照してください。

**注：** 特に記載のないかぎり、コンピュータはすべて Microsoft Windows オペレーティング・システムです。

### シナリオ 1

コンピュータ 1: Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ、プライマリ Foundation Services インスタンスおよび Data Relationship Management CSS ブリッジ

### シナリオ 2

- コンピュータ 1: Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ
- コンピュータ 2: プライマリ Foundation Services インスタンスおよび Data Relationship Management CSS ブリッジ

### シナリオ 3

- コンピュータ 1: Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ、セカンダリ Foundation Services インスタンスおよび Data Relationship Management CSS ブリッジ

- コンピュータ 2: プライマリ Foundation Services インスタンス

#### シナリオ 4

- コンピュータ 1: Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ、セカンダリ Foundation Services インスタンスおよび Data Relationship Management CSS ブリッジ
- コンピュータ 2: Unix/Linux プライマリ Foundation Services インスタンス

#### シナリオ 5

- コンピュータ 1: Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ
- コンピュータ 2: Unix/Linux プライマリ Foundation Services インスタンス
- コンピュータ 3: セカンダリ Foundation Services インスタンスおよび Data Relationship Management CSS ブリッジ

## Data Relationship Management のインストール

Data Relationship Management をインストールする前に、[図 1](#)を確認してください。

▶ Data Relationship Management をインストールするには:

- 1 インストール・プログラムをダウンロードしたディレクトリに移動し、**setup.exe** をダブルクリックします。
- 2 インストールの言語を選択して「OK」をクリックします。
- 3 まだ Microsoft .NET Framework 4.0 をインストールしていない場合は、「インストール」をクリックしてインストールします。
- 4 「ようこそ」ダイアログ・ボックスで、ライセンス契約を確認して「次」をクリックします。
- 5 「次」をクリックして Data Relationship Management ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、「変更」をクリックしてインストールの場所を選択し、「次」をクリックします。
- 6 「設定タイプ」ダイアログ・ボックスで、実行するインストールのタイプを選択して、「次」をクリックします:
  - 「完全」 - アプリケーション・サーバー、Web サーバー、移行ユーティリティ、バッチ・クライアントおよびドキュメントをインストールします。
  - 「カスタム」 - インストールするコンポーネントを選択できます。次のコンポーネントから選択できます:
    - DRM アプリケーション・サーバー
      - DRM Web サーバー
    - DRM 移行ユーティリティ
    - DRM ドキュメント

- DRM バッチ・クライアント

#### 7 次のいずれかの操作を行います:

- 「完全」を選択した場合、次の手順にスキップします。
- 「カスタム」を選択した場合、「カスタム設定」ダイアログ・ボックスでインストールする機能を選択し、「次へ」をクリックします。

#### 8 「インストール」をクリックします。

#### 9 「終了」をクリックします。

**注:** Data Relationship Management アプリケーションを作成して構成するには、オプションを選択して Data Relationship Management 構成コンソールを起動します。

## 分散環境での Data Relationship Management のインストール

次の項を参照してください:

- [セカンダリ・エンジン・ホストのインストール](#)
- [セカンダリ Data Relationship Management Web サーバー・ホストのインストール](#)
- [セカンダリ API アダプタ・ホストのインストール](#)
- [セカンダリ Foundation Services ホストのインストール](#)

## セカンダリ・エンジン・ホストのインストール

複数のアプリケーション・サーバーをインストールする前に、[図 3](#)を確認してください。

オプションのセカンダリ Data Relationship Management エンジン・ホスト・コンピュータをインストールするには、セカンダリ・コンピュータに Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・コンポーネントをインストールします。

**注:** Data Relationship Management Web サーバー・コンポーネントは、エンジン・ホストにとって必要ではありません。

**注:** セカンダリ・サーバーでの構成のために Data Relationship Management 構成コンソールを起動しないでください。

## セカンダリ Data Relationship Management Web サーバー・ホストのインストール

セカンダリ Data Relationship Management Web サーバー・コンピュータをインストールするには、セカンダリ・コンピュータに Data Relationship Management アプリケーション・サーバーおよび Web サーバー・コンポーネントをインストールします。

**注：** Data Relationship Management Web サーバー・コンポーネントは、Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・コンポーネントに依存します。

**注：** セカンダリ・サーバーでの構成のために Data Relationship Management 構成コンソールを起動しないでください。

## セカンダリ API アダプタ・ホストのインストール

セカンダリ・コンピュータに API アダプタ・ホストをインストールするには、セカンダリ・コンピュータに Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・コンポーネントをインストールします。

**注：** Data Relationship Management Web サーバー・コンポーネントは、API アダプタ・ホストにとって必要ではありません。

**注：** セカンダリ・サーバーでの構成のために Data Relationship Management 構成コンソールを起動しないでください。

## セカンダリ Foundation Services ホストのインストール

EPM System インストーラを使用して、セカンダリ Foundation Services インスタンスに次の Foundation Services コンポーネントをインストールする必要があります。

- Foundation Services Web アプリケーション
- 静的コンテンツ・ファイル
- WebLogic アプリケーション・サーバー

## トラブルシューティング

インストールのトラブルシューティングの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

# 2

## Data Relationship Managementの構成

### この章の内容

Data Relationship Management 用の Foundation Services の構成 .....	23
Data Relationship Management 構成コンソールの起動 .....	25
Data Relationship Management アプリケーションの構成 .....	25
構成設定の保存およびサービスの開始.....	39
Web ブラウザでの Data Relationship Management の起動.....	39
移行ユーティリティの構成.....	40
Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシング .....	41
Data Relationship Management でのシングル・サインオンの使用.....	42
Web サーバーでの SSL の停止 .....	44
Web クライアント・ヘルプの構成 .....	44

Data Relationship Management 構成コンソールは、アプリケーション・サーバー構成ユーティリティです。

Data Relationship Management をインストールすると、Data Relationship Management 構成コンソールが自動的にインストールされます。インストール・プログラムの最後にコンソールを開くことができます。

## Data Relationship Management 用の Foundation Services の構成

Foundation Services のインストールには、Data Relationship Management で使用する前に EPM コンフィグレータ・ツールを使用して配置および構成する必要がある複数のコンポーネントが含まれます。

コンポーネントの構成順序の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の構成順序に関する項を参照してください。Foundation Services コンポーネントの構成の実行手順は、EPM System 製品の構成に関する項を参照してください。

詳細は、次を参照してください:

- [セカンダリ Foundation Services ホストの構成](#)
- [外部プロバイダでの Shared Services の構成](#)
- [シングル・サインオン用の Shared Services の構成](#)

- Data Relationship Management 用の CSS モードの構成

## セカンダリ Foundation Services ホストの構成

- CSS ブリッジ・コンポーネントは、Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・インストール・コンポーネントに付属します。
- CSS ブリッジは、サポートされる Microsoft Windows コンピュータ上で実行する必要があります。
- 指定された CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータが Data Relationship Management アプリケーション・コントローラではない場合:
  - CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータに Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・コンポーネントをインストールする必要があります。
  - Data Relationship Management サービスがアプリケーション・コントローラで起動する前に、Windows Data Relationship Management サービスが CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータで起動して実行中である必要があります。
- CSS ブリッジが実行されるコンピュータに Foundation Services をインストールして配置する必要があります。
- CSS ブリッジでセカンダリ Foundation Services インスタンスを使用する場合:
  - EPM System コンフィグレータを使用して、セカンダリ Foundation Services インスタンスで次の Foundation Services コンポーネントを構成する必要があります:
    - 共通設定の構成
    - Oracle Configuration Manager の構成
    - データベースの構成
    - アプリケーション・サーバーへの配置
  - 「構成を適用する EPM Oracle インスタンスを選択してください」という構成では、「EPM Oracle インスタンスのホーム・ディレクトリ」にはデフォルトまたはカスタムのパスを使用し、「EPM Oracle インスタンス名」にはデフォルトを使用します。
  - 「インスタンス・ホームに関連付けられた Shared Services およびレジストリ・データベース接続を設定します」という構成では、「前に構成された Shared Services データベースに接続」オプションを選択し、プライマリ Foundation Services インスタンスに構成されているデータベースの接続情報を指定します。
  - 「アプリケーション・サーバーへの配置 - WebLogic ドメイン情報を指定してください」という構成では、「Web アプリケーションを新規ドメインに配置してください。」というオプションを選択します。
  - インストールおよび構成後に、セカンダリ・コンピュータで EPM Web アプリケーション・サーバーを起動または実行する必要はありません。



## 外部プロバイダでの Shared Services の構成

Shared Services を構成するには、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide の OID、Active Directory およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成に関する項を参照してください。

開発目的で Shared Services を構成し、外部ディレクトリとして WebLogic 埋込み LDAP サーバーを使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-foundation/resource-library-090986.html> に移動して「EPM System Tips & Tricks 1-72 (PDF)」を選択してください。このドキュメントで、WebLogic 埋込み LDAP サーバーを EPM System 11.1.2 製品の外部ディレクトリとして使用できるかどうかに関する項を参照してください。

## シングル・サインオン用の Shared Services の構成

Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide の SSO 用の EPM System の構成に関する項を参照してください。

## Data Relationship Management 用の CSS モードの構成

Shared Services を使用してユーザーを認証するために、CSS 認証モードまたは混合モードで Data Relationship Management サーバーを構成する必要があります。35 ページの「CSS」および37 ページの「認証設定の構成」を参照してください。

## Data Relationship Management 構成コンソールの起動

- ▶ Data Relationship Management 構成コンソールを起動するには、「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。

## Data Relationship Management アプリケーションの構成

Data Relationship Management では、アプリケーションを使用してデータを管理し、データにアクセスするためのユーザー・リクエストを提供します。単一のマシン上で1つ以上の Data Relationship Management アプリケーションを実行できます。アプリケーションを複数のマシン上で実行して、長時間の同時実行操作の処理を分散することもできます。各アプリケーションには、コントローラ、エンジンのセット、およびリポジトリ接続が含まれます。

複数の Data Relationship Management アプリケーションを構成する前に、[図 2](#)を確認してください。

次の項を参照してください:

- アプリケーションの作成
- アプリケーション・コントローラ
- アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定
- 日付、時間および数値のフォーマット
- リポジトリの作成
- ホスト・コンピュータの構成
- 認証設定の構成
- EPM レジストリ設定の構成
- アプリケーションの削除

## アプリケーションの作成

Data Relationship Management アプリケーションは、構成コンソールで作成します。少なくとも 1 つのアプリケーションを作成する必要があります。

▶ Data Relationship Management アプリケーションを作成するには:

- 1 Data Relationship Management 構成コンソールで、「追加」をクリックして新規アプリケーションを作成します。
- 2 「構成」タブで、リポジトリを構成します。

**注：** リポジトリを作成していないか、リポジトリをアップグレードする必要がある場合、リポジトリ・ウィザードを使用する必要があります。28 ページの「リポジトリの作成」を参照してください。

- 3 「構成の保存」をクリックします。
- 4 「ローカル・サービス」メニューから、「開始」をクリックして Data Relationship Management サービスを開始します。

新規アプリケーションを追加する場合、アプリケーションは標準のデフォルト・パラメータで作成されます。デフォルト・アプリケーション名は、コンピュータ名から生成されます。

## アプリケーション・コントローラ

コンピュータを構成して、アプリケーション用のアプリケーション・コントローラにする必要があります。アプリケーションのコントローラとして構成できるのは、1 つのコンピュータのみです。アプリケーション・コントローラであるコンピュータは、Data Relationship Management アプリケーションで構成されているすべてのコンピュータ上のすべての Data Relationship Management プロセスを制御する Data Relationship Management プロセス・マネージャ・プログラムを実行します。

アプリケーション・コントローラ・コンピュータには、Data Relationship Management 構成ファイル(drm-config.xml)も含まれます。Data Relationship Management アプリケーションに対して構成されているコンピュータの数にかかわ

らず、1つの構成ファイルのみが存在します。アプリケーションのすべての構成は、アプリケーション・コントローラ・コンピュータで実行する必要があります。

## サーバーのポート番号

正常に通信するには、プライマリ・サーバーとすべてのセカンダリ・サーバー上の Data Relationship Management Windows サービスで、最小ポート範囲(デフォルトは 5200)の同じポート番号を使用する必要があります。Data Relationship Management のプライマリ・サーバーは、必要に応じて範囲内で他の必須ポートを動的に割り当てます。

## アプリケーションのデフォルト・カルチャの設定

Data Relationship Management アプリケーションごとに使用するデフォルト・カルチャを設定できます。

▶ アプリケーションのデフォルト・カルチャを設定するには:

- 1 Data Relationship Management 構成コンソールで、アプリケーションを選択します。
- 2 「デフォルト・カルチャ」からオプションを選択します:
  - en-US - 英語
  - fr-FR - フランス語
  - de-DE - ドイツ語
  - ja-JP - 日本語
  - ko-KR - 韓国語
  - zh-CHS - 簡体字中国語

## 日付、時間および数値のフォーマット

Data Relationship Management ユーザー・インタフェースにおける日付、時間および数値のプロパティ・データ値のフォーマットは、次の2つの要因によって決まります:

- Data Relationship Management クライアント・コンピュータのブラウザの言語設定
- Data Relationship Management サーバー・コンピュータ上(Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ・サーバー上)の Data Relationship Management サービス・ログオン・アカウントに定義された地域のオプション設定。

Data Relationship Management Web クライアントのセッション情報には、ブラウザの言語設定に定義されたユーザーのカルチャが含まれます。クライアントに表示される、要求されたカルチャのデータ値のフォーマットは、対応するカルチャのフォーマットが、DRM サービス・ログオン・アカウントの地域のオプション用に、Data Relationship Management サーバー上でどのように定義されているかによ

て決まります。クライアントのオペレーティング・システムの地域のオプション設定は、ユーザー・インタフェースにおけるデータ・フォーマットに影響しません。

同様に、Data Relationship Management バッチ・クライアント・パラメータ「/ CultureName」では、ブラウザの言語を介してカルチャのフォーマットを指定できます。また、Web クライアントと同様に、データ値のフォーマットは、対応するカルチャが Data Relationship Management サービス・ログオン・アカウント用に、Data Relationship Management サーバー上でどのように定義されているかによって決まります。

**例** - Data Relationship Management Web クライアントのブラウザの言語が「en-US」に設定されているとします。Data Relationship Management サーバーに Data Relationship Management サービス・ログオン・アカウントとしてログインすると、対応する地域のオプションのカルチャ「English (United States)」の短い日付フォーマットは「MM/dd/yyyy」です。Data Relationship Management クライアント・ユーザー・インタフェースにおける日付は、「MM/dd/yyyy」のフォーマットで表示されます。

**注：** Data Relationship Management サーバー・プロセス・サービスのデフォルトのログオン・アカウントは、「ローカル・システム」です。Data Relationship Management で使用される地域のオプションを表示またはカスタマイズするには、Data Relationship Management サービス・ログオン・アカウントを「ローカル・システム」からローカルの「管理者」アカウントに変更する必要があります。これにより、サービス・アカウントと同じサーバーにログオンし、Data Relationship Management サービスで使用される地域のオプションを表示または変更することができます。

## リポジトリの作成

構成コンソールのリポジトリ・ウィザードでは、新規リポジトリを作成するか、リポジトリをアップグレードできます。アップグレードの詳細は、[58 ページの「既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード」](#)を参照してください。

▶ 新規リポジトリを作成するには:

- 1 「リポジトリ・ウィザード」ボタンをクリックします。
- 2 「新規リポジトリの作成」を選択します。
  - オプション: 「既存のリポジトリに基づいたサイズの推定」を選択すると、既存のリポジトリのサイズに基づいて新規リポジトリを作成できます。
  - オプション: 「SQL スクリプトの生成」を選択すると、データベース作成スクリプトを作成してダウンロードし、後から実行できます。
- 3 「次」.をクリックします。
- 4 次のいずれかの操作を行います:
  - スクリプトを生成する場合、[31 ページの「SQL スクリプトの生成」](#)に移動してください。

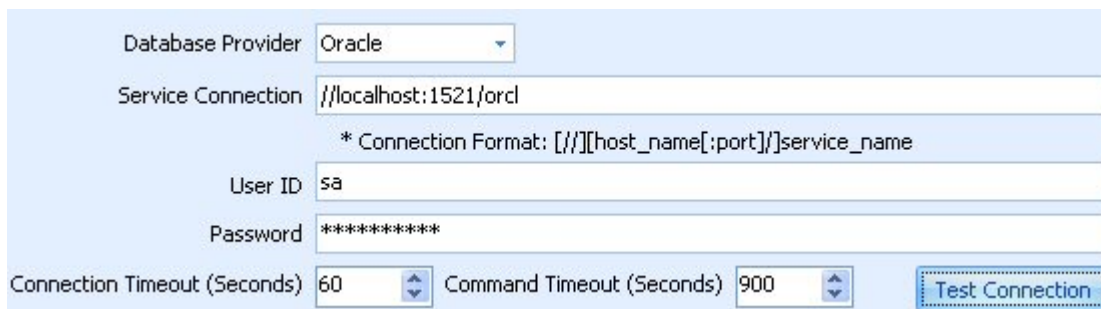
- 前の手順で他のオプションを選択した場合、次の手順に進んでください。

## 5 次を実行します:

- データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
- 新規リポジトリを配置するターゲット・データベースへの接続を入力します。
- データベース・スキーマおよびデータ・ファイルを作成する権限を持つ管理者のユーザー ID およびパスワードを入力します。
- **オプション:**「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は 60 秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラーを生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は 900 秒です。

**注:** タイムアウト値をゼロに設定すると、タイムアウトは使用されません。これらの設定は `drm-config.xml` に保存され、エンジンによって起動時に使用されます。大規模操作(大規模なバージョンの削除など)を実行するには、「コマンドのタイムアウト」をデフォルトより大きい値に設定します。

- 「接続のテスト」をクリックします。



## 6 「次」をクリックします。

## 7 次のいずれかの操作を行います:

- Oracle Database の場合、次の手順に進んでください。
- SQL Server データベースの場合、[30 ページの「SQL Server データベースの作成」](#)に進んでください。

## 8 Data Relationship Management リポジトリのスキーマ所有者として作成されるユーザーの ID およびパスワードを入力します。

## 9 デフォルト・テーブルスペース設定を受け入れるか、変更を加えて「次」をクリックします。

**注:** データ、インデックス、トランザクションおよびプロパティには専用のテーブルスペースを使用することを強くお勧めします。デフォルト・テーブルスペースの名前は、すでに使用中である可能性があり、新しいテーブルスペースの名前を指定しない場合は再利用されます。

10 「アプリケーション管理者の作成」 ページで、管理者ユーザーのパスワードを入力して「次」をクリックします。

11 「リポジトリ確認の作成」 ページで、設定を確認して「次」をクリックし、作成プロセスを開始します。

データベースが作成されると、成功メッセージが表示されます。

12 「次」をクリックします。

**ヒント：** リポジトリの作成、コピーおよびアップグレードの情報は、リポジトリ・ウィザードのログに書き込まれます。ウィザードの「リポジトリの操作の完了」ページの「ログの保存」をクリックし、ログ・ファイルを保存します。

13 「リポジトリの操作の完了」画面で、「終了」をクリックします。

設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。

**注：** メニュー・バーからリポジトリ・ウィザードを起動した場合、「終了」によってウィザードの最初のページに戻ります。「アプリケーション」タブのボタンからウィザードを起動した場合、「終了」をクリックすると選択したアプリケーションに設定が適用されます。「取消し」をクリックしてもリポジトリは作成されますが、設定はどのアプリケーションにも適用されません。構成を保存すると新規データベースが適用されません。

14 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

## SQL Server データベースの作成

▶ Data Relationship Management リポジトリ用の SQL Server データベースを構成する方法:

1 Data Relationship Management データベースのログインとして作成されるユーザーの ID およびパスワードを入力します。

---

**注意** データベース・ユーザーの名前またはパスワードを作成する場合、アットマーク(@)、スラッシュ(/)、カンマ(,)およびコロン(:)の各記号は使用できません。

---



User Settings

User Id

Password  Confirm Password

Repository Settings

Database Name   Use server defaults for data files

Data File

Name

Path

Size (Mb)

Log File

Name

Path

Size (Mb)

- 2 Data Relationship Management リポジトリを保持するために作成するデータベースの名前を入力します。

---

**注意** データベース名を数字で始めることはできません。

---

- 3 次のいずれかを実行して「次」をクリックします:
  - 「データ・ファイルにサーバーのデフォルトを使用する」を選択すると、データベースとログ・ファイルのパスおよびサイズとしてデフォルト設定が使用されます。
  - データ・ファイルとログ・ファイルのパスおよびサイズを入力します。
- 4 「アプリケーション管理者の作成」ページで、管理者ユーザーのユーザー名とパスワードを入力し、「次」をクリックします。
- 5 「構成の作成」ページで、ターゲット・リポジトリ情報を確認し、「次」をクリックします。

**注：** リポジトリが作成されたら、ログを保存できます。

- 6 次のいずれかの操作を行います:
  - 「終了」をクリックして現在のアプリケーションに変更を適用します。設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。
  - 「取消し」をクリックしてウィザードを終了します。
- 7 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

## SQL スクリプトの生成

手動でリポジトリを作成できる SQL スクリプトを生成できます。スクリプトを保存する場合、リポジトリ接続情報を指定する必要はありません。

▶ SQL スクリプトを生成するには:

- 1 「リポジトリ・ウィザード」をクリックします。
- 2 「SQL スクリプトの生成」を選択して、「次」をクリックします。
- 3 「Oracle」または「SQL Server」タブを選択してリポジトリ情報を入力します。
- 4 「次」をクリックします。
- 5 「リポジトリ作成スクリプト」画面で、「ファイルに保存」をクリックし、ファイルを保存するフォルダに移動します。

**注:** Oracle および SQL Server データベースのファイル名は、両方とも `drm-create-database.sql` です。

- 6 「次」をクリックします。
- 7 「リポジトリ・オブジェクト作成スクリプト」画面で、「ファイルに保存」をクリックし、`drm-create-schema-objects.sql` ファイルを保存するフォルダに移動します。
- 8 「次」をクリックします。
- 9 「終了」をクリックします。

## データベース・スクリプトの手動による実行

ローカル・セキュリティの順に基づいて、新規データベースを作成する場合、Data Relationship Management をインストールするユーザーに使用できないアクセス・レベルが必要になることがあります。そのため、インストール中に、データベース・スクリプトを自動的に実行せずにディスクに保存するオプションがあります。その後、適切なデータベース管理者が個別にスクリプトを実行できます。

▶ 手動でスクリプトを実行するには:

- 1 データベース管理者権限を持つユーザーとしてデータベース・サーバーにログインします。
- 2 次の順序でスクリプトを実行します:
  - `drm-create-database.sql`
  - `drm-create-schema-objects.sql`
- 3 すべてのスクリプトが正常に実行された後、Data Relationship Management 構成コンソールを開きます。
- 4 「追加」をクリックします。
- 5 「リポジトリ構成」タブで、サービス接続情報を入力し、「構成の保存」をクリックします。

**注:** 「接続のテスト」をクリックして、接続を確認できます。

これで、Data Relationship Management リポジトリの手動による作成が完了しました。



## 6 「アプリケーション」リストからアプリケーションを選択します。

データベースは、アプリケーションの最初の起動時に自動的に初期化されます。

## ホスト・コンピュータの構成

スケーラビリティのため、オプションで複数のコンピュータ全体に Data Relationship Management エンジン・ホスト、API アダプタ・ホスト、Web サーバーおよび CSS ブリッジ・ホストを分散できます。構成の詳細は、適切なホスト・コンピュータの項を参照してください:

- プロセス・マネージャ
- イベント・マネージャ
- エンジン・ホスト
- API アダプタ・ホスト
- Web サーバー
- CSS
- SMTP サーバー

## プロセス・マネージャ

▶ プロセス・マネージャ・コンピュータを構成するには:

### 1 コンピュータ名とポート番号を入力します。

**注:** プロセス・マネージャ・ホストは、Data Relationship Management アプリケーション・コントローラ・コンピュータ上に存在する必要があります。ポート番号は変更できます。

### 2 「エンジン起動のタイムアウト」には、Data Relationship Management エンジン・プロセスの起動時にプロセス・マネージャが待機する秒数を入力します。

**注:** エンジンがこの秒数以内に応答しない場合、Windows イベント・ログにエラーが記録されます。

### 3 「合計 SRO エンジン」には、短い読取り専用エンジンの合計数を入力します。

**注:** 短い読取り専用エンジンのデフォルト値は 1 で、特に Oracle サポートからの指示がなければ変更しないでください。

## イベント・マネージャ

- ▶ イベント・マネージャ・コンピュータを構成するには、コンピュータ名を入力します。

**注：** イベント・マネージャは、アプリケーション・コントローラ上で実行することをお勧めします。

## エンジン・ホスト

- ▶ エンジン・ホスト・コンピュータを構成するには、ホスト上で起動する Data Relationship Management エンジンのコンピュータ名および最大数を入力します。

## API アダプタ・ホスト

API アダプタ・コンポーネントは、Data Relationship Management アプリケーション・サーバー・インストール・コンポーネントに付属します。API アダプタ・ホストとして、Data Relationship Management アプリケーション・コントローラまたはセカンダリ Data Relationship Management コンピュータを使用できます。

**注：** API アダプタ・ホストは、Web サービス API を使用して Data Relationship Management にアクセスする場合にのみ必要です。

- ▶ API アダプタ・ホストとして Data Relationship Management アプリケーション・コントローラを構成するには、アプリケーション・コントローラのコンピュータ名、ポート番号および SSL 有効化用の証明書番号を入力します。プラス記号をクリックしてホスト・コンピュータを追加します。

## Web サーバー

「UI Web サーバー」タブで、Data Relationship Management Web クライアント・アプリケーションを実行するために構成されているサーバーをリストします。

このタブでは、次の操作も可能です：

- 「Web ファーム」タブで、ノード URL を計算するための追加の Web サーバー属性を構成します。
- 「匿名プロファイル」タブで、ユーザーがログインせずにカスタム URL を通じて Web クライアントにアクセスできるようにする匿名プロファイルを設定します。

- ▶ Web サーバーを構成するには：

- 1 「ホスト・サーバー」タブで、Data Relationship Management Web クライアント・アプリケーションを実行するために構成されているサーバーの名前を入力します。

---

**注意** ユーザーが Data Relationship Management にログインしたときに Data Relationship Management Web クライアントのアプリケーション・リストにアプリケーションを表示するためには、コンピュータ名をここにリストする必要があります。

---

## 2 「Web ファーム」タブで、次の手順を実行します:

1. 「ホスト名」に、すべての計算済ノード URL で使用するコンピュータ名を入力します。
2. ホストのポート番号を入力します。

**注:** デフォルトは 80 です。

3. 「パス」に、Data Relationship Management ログオン・ページのディレクトリ・アプリケーション・パスを入力します。

**注:** デフォルトは `http://localhost/drm-web-client` です。

4. 「SSL を使用」を選択すると、計算済 URL "`https://`"が使用されます。それ以外の場合、"`http://`"が使用されます。
5. 「テスト URL」リンクをクリックして、リンクが有効であることを確認します。

## 3 「匿名プロファイル」タブで、次の手順を実行します:

1. 「プロファイルの追加」テキスト・ボックスに名前を入力します。
2. プラス記号(+)をクリックしてプロファイルのリストにプロファイルを追加します。
3. プロファイルのログイン情報を入力します。
4. 「プロファイルの保存」をクリックして新規プロファイルを検証し、メモリー内に保存します。
5. 「構成の保存」をクリックすると、Data Relationship Management 構成にプロファイルを永続的に保存できます。

**注:** このタブのすべてのプロファイルは、「ホスト・サーバー」タブのサーバーに保存されます。

匿名アクセス URL は、`http://DRM_Web_Server/drm-web-client/Logon.aspx?app=DRM_App_Name&login=Anonymous` という形式で作成されます。

たとえば、`http://localhost/drm-web-client/Logon.aspx?app=DRMApp1&login=AnonUser1` となります。

## CSS

▶ CSS を構成するには:

- 1 「一般」タブで、次のオプションを構成します。

- 「CSS ブリッジの使用可能」 - 選択すると CSS が有効になります。
  - 「SSO の使用可能」 - 選択するとシングル・サインオンが有効になります。

**注：** SSO の詳細は、42 ページの「Data Relationship Management でのシングル・サインオンの使用」を参照してください。認証設定の詳細は、37 ページの「認証設定の構成」を参照してください。

- 「CSS ブリッジ・ホスト」 - Data Relationship Management が Shared Services と通信するために必要な Data Relationship Management CSS ブリッジ・コンポーネントを実行する Shared Services コンピュータの名前を入力します。

適切に構成すると、drm-netjbridge-host.exe プロセスが CSS ブリッジ・ホストで起動されます。構成の問題をトラブルシューティングするには、CSS ブリッジ・ホストおよび Data Relationship Management コンピュータの Windows イベント・ログを参照してください。

- 「JVM パス」 - Java 仮想マシン(jvm.dll)のパス。デフォルトの場所は、C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\common\JRE\Sun\1.6.0\bin\server\jvm.dll です。
- 「Oracle インスタンス」 - EPM インスタンスのパス。デフォルトの場所は、C:\Oracle\Middleware\user\_projects\epmsystem1 です。

**注：** 「一般」および「クラス・パス」タブのすべての設定は、必ずしも Data Relationship Management サーバーまたはアプリケーション・コントローラに相当しない CSS ブリッジ・ホスト・コンピュータを基準とします。

- 2 「クラス・パス」タブで、必要な.jar ファイルへのパスを入力します。これらのパスは、ユーザーの環境に応じて変更する必要があります。クラス・パスの例は次のとおりです:

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products
\DataRelationshipManagement\server\jar\awbutil.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products
\DataRelationshipManagement\server\jar\cassecurity.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\products
\DataRelationshipManagement\server\jar\drm-epm-registry.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\EPMSys11R1\common\jlib\11.1.2.
0\epm_j2se.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\wlserver_10.3\server\lib\wlsqserver.jar
```

```
C:\Oracle\Middleware\modules\javax.servlet_1.0.0.0_2-5.jar
```

## SMTP サーバー

データ・ガバナンス機能では、電子メール通知を使用して、ガバナンス・ユーザーおよびデータ・マネージャに要求アクティビティを通知します。データ・ガバナ

ンス通知が機能するように SMTP サーバー設定を有効にして構成する必要があります。

▶ SMTP サーバーを構成するには:

- 1 「SMTP の使用可能」を選択します。
- 2 SMTP サーバーのホスト名を指定します。
- 3 SMTP ポート番号を指定します。
- 4 「SMTP 認証が必要」を選択し、SMTP サーバーのユーザー名およびパスワードを入力します。
- 5 電子メールの送信元フィールドに表示される送信者名を入力します。
- 6 送信者の電子メール・アドレスを入力します。

## 認証設定の構成

「認証設定」タブで、認証タイプの選択、内部認証ポリシーの変更およびユーザーのロックアウト・パラメータの設定を行うことができます。

▶ 認証設定を構成するには:

- 1 「設定のロード」をクリックして、Data Relationship Management システム・プリファレンスに保存されているとおりに現在の設定を移入します。
- 2 認証メソッドを選択します:
  - 「内部」 - Data Relationship Management によって完全に管理されます。
  - 「CSS」 (Common Security Services) - Shared Services を使用して外部ユーザー・ディレクトリが集中的にサポートされます。
  - 「混合」 - 認証オプション(内部または CSS)をユーザーが指定できます。
- 3 パスワード・プリファレンスを設定します:
  - 「有効期間(日数)」 - ユーザーのパスワードが有効である日数。
  - 「最大長」 - ユーザー・パスワードの最大長であり、0 (ゼロ)は最大長がないことを示します。
  - 「最小長」 - ユーザー・パスワードの最小長であり、0 (ゼロ)は最小長がないことを示します。
  - 「警告期間」 - 正または負の数。実際にログインできなくなるパスワード有効期限日の何日前(-)または何日後(+)に、パスワードを変更するようユーザーに警告するかを指定します。
- 4 ユーザー・ロックアウト・プリファレンスを設定します:
  - 「非アクティブなしきい値」 - 非アクティブなユーザーがロックアウトされるまでの最大日数。
  - 「許可されたログインが無効です」 - ユーザーがロックアウトされるまでの無効なログイン試行の最大回数。
- 5 「設定の保存」をクリックします。

## EPM レジストリ設定の構成

Performance Management Architect を使用して Data Relationship Management から階層、ノードおよびプロパティをインポートする場合、Oracle Hyperion Shared Services Registry に Data Relationship Management アプリケーション・インスタンスを登録する必要があります。Data Relationship Management アプリケーションおよび Oracle Hyperion EPM Architect は、同じ Shared Services インスタンスに登録する必要があります。

**注：** CSS ブリッジ・コンポーネントが有効である必要があります、登録または登録解除するアプリケーションが実行中である必要があります。

▶ Data Relationship Management アプリケーションを登録するには:

1 「EPM レジストリ」タブで、次の情報を入力することで Data Relationship Management Web サービスを指定します。

- HTTP または HTTPS プロトコル
- Web サービスのホスト・コンピュータ名
- ポート番号
- アプリケーション・コンテキスト - Web サービスの WebLogic アプリケーションの名前

この情報は、URL に結合されます(たとえば、`http://servername:9000/oracle-epm-drm-webservices` など)。

ここで、`http` はプロトコル、`servername` は Web サービスのホスト・コンピュータ名、`9000` はポート番号、`oracle-epm-drm-webservices` は Web サービスの WebLogic アプリケーションの名前です。

2 Data Relationship Management API アダプタ URL を選択します。

3 統合のために使用する Data Relationship Management のユーザー・ログイン情報を指定します。

4 「登録」をクリックします。

**注：** 「登録解除」をクリックするとアプリケーションを登録解除できます。アプリケーションを登録解除するには、CSS ブリッジが有効である必要があります、登録解除するアプリケーションが実行中である必要があります。

## アプリケーションの削除

不要になったアプリケーションは削除できます。

- ▶ アプリケーションを削除するには、アプリケーションを右クリックして「削除」を選択します。

## 構成設定の保存およびサービスの開始

構成コンソールで行った変更を保存し、Data Relationship Management サービスを再起動してそれらの変更を有効にする必要があります。

- ▶ 設定を保存して Data Relationship Management サービスを開始するには:
  - 1 構成コンソールで、「構成の保存」をクリックします。
  - 2 「ローカル・サービス」メニューから、「開始」をクリックします。

---

**注意** 「Oracle DRM サーバー・プロセス」サービスがアプリケーション・コントローラ・サーバーで起動する前に、すべてのセカンダリ・サーバーで「Oracle DRM サーバー・プロセス」サービスが起動して実行中である必要があります。

---

## Web ブラウザでの Data Relationship Management の起動

- ▶ Web ブラウザで Data Relationship Management を起動するには:
  - 1 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「Web クライアント」の順にクリックします。
  - 2 リポジトリ・ウィザードのプロセス中に定義した管理ユーザーの ID とパスワードを使用するか、アップグレードされたりポジトリの既存のユーザーを使用してログインします。

**注：** スクリプトから手動でリポジトリを作成した場合、パスワードは"Welcome!"になります。

## Internet Explorer での互換表示モードの無効化

Data Relationship Management は、Microsoft Internet Explorer に用意されている互換表示モードをサポートしていません。

- ▶ この機能を無効にするには:
  - 1 Internet Explorer で、「ツール」、「互換表示設定」の順に選択します。
  - 2 次のオプションが選択されていないことを確認します:
    - イン트라ネットサイトを互換表示で表示する
    - すべての Web サイトを互換表示で表示する

3 「閉じる」をクリックします。

## 移行ユーティリティの構成

次の表に、web.config ファイルの appSettings セクションにある移行ユーティリティの構成設定を示します。このファイルは、デフォルトで C:\Oracle\Middleware\EPMSysstem11R1\products\DataRelationshipManagement\client\migration-client ディレクトリに格納されます。

**注：** web.config ファイルを変更した場合、IIS で Web サイトを再起動して変更を有効にする必要があります。

表 1 構成設定

キー	説明
configuredServers	admin-configured 接続を指定します。 デフォルト値は net.tcp://localhost:5210/Oracle/Drm/ProcessManager であり、localhost はコンピュータで、5210 は構成済のプロセス・マネージャ・ポートです。
maximumExceptionsOnImport	エラー後も続行するオプションを選択した場合、ロード中に生成できる例外の最大数を指定します。 0 より大きい整数を指定します。デフォルト値は 1000 です。
showExceptionDetail	詳細な例外情報をエラー・ページに表示するかどうかを指定します。 <b>注意</b> 詳細情報にはファイル・パスなどの機密情報が含まれる可能性があるため、詳細情報をすべて表示するとセキュリティ上のリスクが発生する場合があります。この設定は、デバッグまたはテスト目的でのみ有効化する必要があります。 True を指定すると例外の詳細が有効になり、False を指定すると log4net 設定に応じて詳細が表示されません。デフォルト値は False です。
enableAboutPage	「バージョン情報」ページを有効にするかどうかを指定します。「バージョン情報」ページには移行ユーティリティおよびシステム・コンポーネントのバージョンが表示されますが、セキュリティを向上するためこのページはデフォルトで無効になっています。移行ユーティリティのバージョンを確認する場合、このページを有効にできます。 ページを有効にしてそのアクセスを管理者に制限するには、/Forms/About.aspx ファイルの Discretionary Access Control List (DACL) を編集します。DACL、ディレクトリ・セキュリティおよび匿名アクセスの対話を通じて Web ページへのアクセスを制御する方法の詳細は、IIS のドキュメントを参照してください。 True を指定すると「バージョン情報」ページが表示されます。デフォルト値は False です。

詳細は、「[アップロード・ファイル・サイズの増加](#)」を参照してください。

## アップロード・ファイル・サイズの増加

アップロード・ファイルのデフォルト制限は 4MB です。デフォルト制限を 20MB に変更するには、次の設定を web.config ファイルの <system.web> 要素に追加します:



```
<httpRuntime maxRequestLength="20480" executionTimeout="3600" />
```

**注：** デフォルトでは、web.config ファイルは C:\Oracle\Middleware\EPMSysystem11R1\products\DataRelationshipManagement\client\migration-client に存在します。

## Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシング

2 つ以上の Data Relationship Management Web アプリケーションにロード・バランシング・サポートを提供するように Oracle HTTP Server を構成できます。Data Relationship Management Web クライアントをホストする IIS サーバーに要求をリダイレクトするように Oracle HTTP Server を設定します。この手順は、EPM System インストーラによってインストールされる Oracle HTTP Server が論理ホストであることが前提です。EPM System インストーラは、Oracle HTTP Server に対して必要な前提条件チェックを実行します。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。

➤ Data Relationship Management Web クライアントのロード・バランサとして Oracle HTTP Server を設定するには:

- 1 IIS を実行している 2 つ以上のコンピュータに Data Relationship Management Web サーバー・コンポーネントをインストールします。
- 2 [25 ページの「Data Relationship Management アプリケーションの構成」](#)に記載された手順を使用して、Data Relationship Management アプリケーションおよびホスト・コンピュータを構成します。
- 3 次の場所にある Oracle HTTP Server の httpd.conf ファイルを開きます:

```
MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/httpConfig/ohs/config/OHS/ohs_component/httpd.conf
```

- 4 次のディレクティブが存在し、有効であることを確認します。存在しない場合はディレクティブを追加します。

```
LoadModule proxy_balancer_module "${ORACLE_HOME}/ohs/modules/mod_proxy_balancer.so"
```

```
LoadModule headers_module "${ORACLE_HOME}/ohs/modules/mod_headers.so"
```

- 5 Data Relationship Management Web サーバー・コンポーネントをホストする IIS サーバーごとに BalanceMember ディレクティブを追加して、Data Relationship Management Web クライアントのプロキシ・バランサ定義を作成します。

```
#Configure members for cluster
<Proxy balancer://iisdrm>
    BalancerMember http://Machine1:80/drm-web-client route=server1
    BalancerMember http://Machine2:80/drm-web-client route=server2
</Proxy>
```

- 6 次のディレクティブを追加して、固定ロード・バランシングを使用可能にします。これらのサンプル・ディレクティブでは、Oracle HTTP Server に、前の手順で定義したプロキシ・バランサの固定ロード・バランシングのルートを記録する Cookie を挿入するよう指示します。

```
Header add Set-Cookie "BALANCEID= iisdrm. %{BALANCER_WORKER_ROUTE}e; path=/
drm-web-client;" env=BALANCER_ROUTE_CHANGED
```

- 7 次のフォワードおよびリバース・プロキシ・ディレクティブを追加します。

```
#The actual ProxyPass
ProxyPass /drm-web-client balancer://iisdrm stickysession=BALANCEID
nofailover=Off

#Do not forget ProxyPassReverse for redirects
ProxyPassReverse /drm-web-client http://<drm_web_server1>:80/drm-web-client
ProxyPassReverse /drm-web-client http://<drm_web_server2>:80/drm-web-client
```

- 8 httpd.conf ファイルを保存して、Oracle HTTP Server インスタンス用の Oracle Process Manager サーバーを再起動します。

構成後、Data Relationship Management Web アプリケーションには、`http://<ohs_server>:<port>/drm-web-client` という URL を使用してアクセスできます。

## Data Relationship Management でのシングル・サインオンの使用

Data Relationship Management のシングル・サインオン(SSO)では、様々なコンポーネントをインストールして構成する必要があります。一般的な Web SSO 環境では、Web アイデンティティ管理ソリューションによって、1つ以上の独立したソフトウェア・システムの認証および権限付与を制御します。SSO の目的は、システムごとにログインのプロンプトを表示せずに、ユーザーが様々な独立したシステムにアクセスできるようにすることです。

Data Relationship Management は、SSO を実装するために、Shared Services、Web アイデンティティ管理ソリューション(Oracle Access Manager など)および外部ユーザー・ディレクトリ(Oracle Internet Directory または Microsoft Active Directory)を利用します。

次の手順を使用して SSO をインストールおよび構成します。

タスク	参照先
1. 外部ユーザー・ディレクトリで Shared Services を構成します。	Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide の OID、Active Directory およびその他の LDAP ベースのユーザー・ディレクトリの構成に関する項を参照してください。

タスク	参照先
2. SSO 用の Shared Services を構成します。	Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide の SSO 用の EPM System の構成に関する項を参照してください。
3. Data Relationship Management をインストールします。	<a href="#">20 ページの「Data Relationship Management のインストール」</a> を参照してください。
4. Data Relationship Management 構成コンソールで、CSS 認証モード用に Data Relationship Management を構成して SSO を有効にします。	<a href="#">33 ページの「ホスト・コンピュータの構成」</a> を参照してください。
5. Data Relationship Management Web アプリケーションを保護し、Shared Services で構成された同じ外部ユーザー・ディレクトリを使用するように Web アイデンティティ管理ソリューションを構成します。	<a href="#">43 ページの「Web アクセス管理」</a> を参照してください。

詳細は、「[Web アクセス管理](#)」を参照してください。

## Web アクセス管理

Data Relationship Management Web アプリケーション・リソースは、Web アプリケーションに対するすべての要求を Oracle Access Manager などの Web アクセス管理アプリケーションにリダイレクトするように保護する必要があります。ユーザーが基本認証を使用してセキュリティ・エージェントに対して認証した後、エージェントは要求を Data Relationship Management Web アプリケーションに転送し、そこで HTTP ヘッダー情報が認証のために Data Relationship Management サーバーに渡されます。

### Oracle Access Manager

Oracle Access Manager (OAM)によって、Data Relationship Management Web アプリケーションに対する認証および権限付与が行われます。このドキュメントでは、OAM がインストールされており、Data Relationship Management Web アプリケーションに対するアクセス・ポリシーを使用して構成されていると仮定します。詳細は、OAM アクセス管理ガイドのアクセス・システムの構成およびリソースの保護に関する項を参照してください。

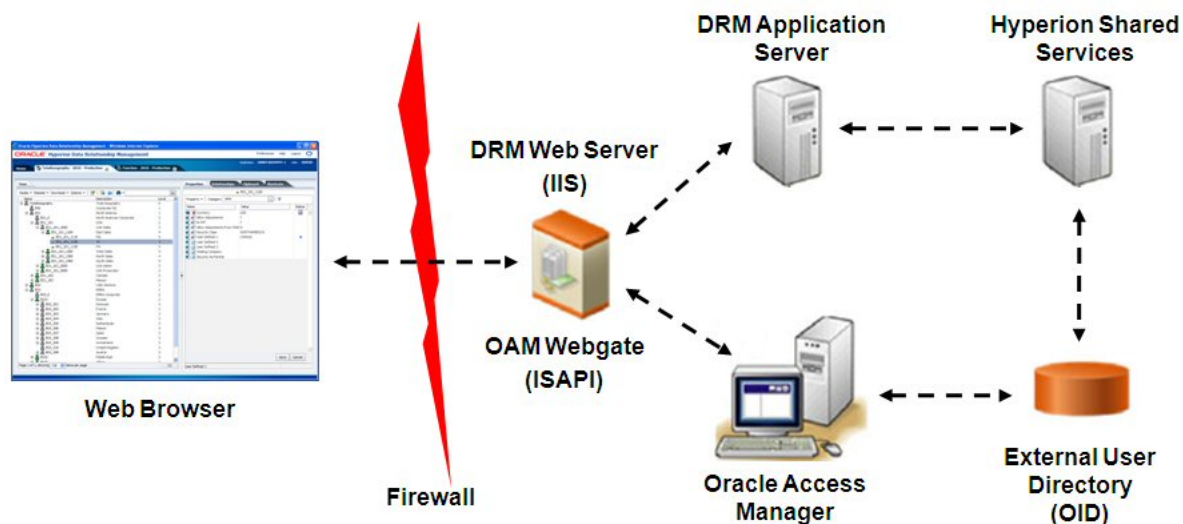
Data Relationship Management は、次のいずれかのオプションを使用して Oracle Access Manager とともに構成できます:

- Data Relationship Management Web サーバーに Oracle Access Manager 10g Webgate for IIS をインストールして構成
- Data Relationship Management Web サーバーがロード・バランシングされるように Oracle HTTP Server を設定し、Oracle Access Manager 11g Webgate for OHS をインストール

WebGate モジュールは、Web サーバー上の Web コンテンツに対する HTTP 要求を捕捉して、Oracle Access Manager に転送します。

Oracle Access Manager 10g Webgate for IIS のダウンロードについては、Oracle Access Manager 10g - non OHS 11g Webgates and 3rd Party Integrations の Readme ファイル (<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/101401-099957.html>) を参照してください。

次の図は、Data Relationship Management Web サーバー上の 10g Webgate for IIS を使用した Oracle Access Manager でのプロセス・フローを示しています：



## Web サーバーでの SSL の停止

Oracle HTTP Server (OHS)を使用して、クライアントの Web ブラウザから IIS Data Relationship Management Web アプリケーションの `drm-web-client` と SSL で保護された通信を行うことができます。この構成では、クライアントのブラウザは、HTTPS プロトコルを通じて OHS と通信し、OHS はプロキシとして機能して HTTP を通じて Data Relationship Management Web アプリケーションと通信します。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide の Web サーバーでの SSL の停止に関する項を参照してください。

## Web クライアント・ヘルプの構成

Data Relationship Management のオンライン・ヘルプ・コンテンツは、中央の Oracle ダウンロード場所から提供されます。これにより、Data Relationship Management のダウンロードとインストールにかかる時間が短縮されます。

オンライン・ヘルプにインターネット経由でアクセスできないユーザーがいる場合は、ヘルプ機能を自分の環境にインストールして構成することが可能です。インストール・プロセス中に「DRM ドキュメント」コンポーネントを選択すると、Data Relationship Management Web サーバーにヘルプ機能がインストールされます。

**注：** 第 508 条に準拠したアクセシブルなヘルプが必要な場合は、ヘルプがローカルに実行されるようにインストールおよび構成を行う必要があります。

- ▶ ヘルプ機能が Data Relationship Management Web サーバー上で実行されるように構成するには:

- 1 %EPM\_ORACLE\_HOME%\products\DataRelationshipManagement\client\web-client にインストールされている Web.config ファイルを見つけて開きます。
- 2 "Hosted Help Options below"を検索し、"<add key="で始まる 3 行のコードをコピーしてそのセクションに貼り付け、次のように編集します:

```
<add key="HostedHelpUseRemote" value="false"/>  
<add key="HostedHelpHost" value="Web_Server_Name"/>  
<add key="HostedHelpAppContext" value="/drm-web-client/  
documentation/" />
```

Web\_Server\_Name は、http://abc12345.us.oracle.com のようなホスト・マシンの名前です。

- 3 Hosted Help セクションにある元の"<add key="行をコメント・アウトします。
- 4 ファイルを保存します。

**注：** Data Relationship Management をアンインストールまたは再インストールすると、Web.config ファイルは上書きされます。ローカル・ヘルプを使用するためにファイルを手動で変更していた場合は、その変更を再度行う必要があります。



# 3

## Data Relationship Management Webサービス APIの配置および構成

### この章の内容

システム要件.....	47
配置の前提条件 .....	48
Web サービス・アプリケーションの配置 .....	49
Data Relationship Management Web サービスの保護 .....	50
Oracle Enterprise Manager を使用した Data Relationship Management Web サービスのテスト .....	52
トラブルシューティング.....	53

Data Relationship Management Web サービス API によって、Data Relationship Management サーバーとの統合が実現します。Web サービスには、SOAP プロトコルを使用して、HTTP を通じてアクセスします。これは、Java で実装し、WebLogic アプリケーション・サーバーに配置します。これは、Data Relationship Management API アダプタ・サービスと内部的に通信します。

Data Relationship Management Web サービスでは、ユーザーは、Weblogic と Shared Services の両方からアクセス可能な外部ユーザー・ディレクトリを使用して認証される必要があります。

Data Relationship Management Web サービス API を配置する前に、[図 6](#) と [図 7](#) を確認してください。

## システム要件

- Oracle WebLogic Server 11g
- Data Relationship Management API アダプタ
- Oracle Web Services Manager (OWSM)
- Shared Services
- Oracle Internet Directory や Microsoft Active Directory などの外部ユーザー・ディレクトリ

**注：** 最新のシステム要件は、[Oracle Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックス](#)を参照してください。

## 配置の前提条件

次の項では、Data Relationship Management Web サービス API を配置する場合の前提条件について説明します:

- [Foundation Services](#) のインストールおよび構成
- [Oracle Web Services Manager](#) 用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール
- [Oracle Web Services Manager](#) の構成
- 外部プロバイダでの [WebLogic](#) の構成
- [API アダプタ](#) の構成

## Foundation Services のインストールおよび構成

Web Services (WS) Security をサポートするには、Foundation Services をインストールし、認証で Shared Services を使用するように Data Relationship Management を構成する必要があります。Foundation Services をインストールすると、WebLogic および Oracle Web Services Manager コンポーネントがインストールされます。Oracle Hyperion Foundation Services のインストールの詳細は、[18 ページの「Foundation Services」](#) を参照してください。

## Oracle Web Services Manager 用のメタデータ・サービス・スキーマのインストール

Oracle Web Services Manager が機能するには、データベースが必要です。Oracle Web Services Manager 用のメタデータ・サービス・スキーマをインストールする方法に関する要件および手順は、次のドキュメントを参照してください。

- [Oracle Enterprise Performance Management](#) インストールおよび構成ガイドのリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成に関する項
- [Oracle Fusion Middleware](#) システム要件および仕様のリポジトリ作成ユーティリティ(RCU)の要件に関する項

**注:** Oracle Fusion Middleware のドキュメントは、<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#middleware> で入手できます。

## Oracle Web Services Manager の構成

Oracle Web Services Manager を構成するには、Oracle Fusion Middleware 構成ウィザードを実行し、WebLogic ドメインを構成します。次に、そのドメインで構成する製品を選択します。



Oracle Web Services Manager を構成するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Oracle Web Services Manager の構成に関する項を参照してください。

## 外部プロバイダでの WebLogic の構成

WebLogic でデプロイされた Data Relationship Management Web サービス・アプリケーションは、外部認証のユーザーのために、Shared Services で構成されたのと同じユーザー・ディレクトリにアクセスするよう構成する必要があります。この構成は、Oracle Web Services Manager で使用可能な WS-Security ポリシーをサポートする必要があります。

WebLogic を構成するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の OID、MSAD、SunOne に対する WebLogic ドメインの構成に関する項を参照してください。

## API アダプタの構成

API アダプタは、Data Relationship Management 構成コンソールを使用して構成する必要があります。Data Relationship Management アプリケーションを構成する場合、「ホスト・マシン」タブで API アダプタ・ホストを設定します。詳細は、33 ページの「ホスト・コンピュータの構成」を参照してください。

**注：** API アダプタは、Web サービスとの内部通信で使用され、カスタム API プログラムで直接使用することはできません。

## Web サービス・アプリケーションの配置

oracle-epm-drm-webservices.ear ファイルは、既存の WebLogic ドメインに配置する必要があります。oracle-epm-drm-webservices.ear ファイルは、アプリケーション・コントローラ・マシンの %EPM\_ORACLE\_HOME%\products\DataRelationshipManagement\api ディレクトリにあります。

oracle-epm-drm-webservices.ear を WebLogic に配置します。Web アプリケーションをインストールする手順は、『Oracle Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』の Web サービス・アプリケーションの配置に関する項を参照してください。

**注：** Oracle Fusion Middleware のドキュメントは、<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html#middleware> で入手できます。

# Data Relationship Management Web サービスの保護

Oracle Web Services Manager のセキュリティ・ポリシーを使用して Data Relationship Management Web サービスを保護することが重要です。使用状況に応じて異なるポリシーをアタッチできます。

Data Relationship Management Web サービスでは次のポリシーを使用できます:

目的	ポリシー
Oracle Hyperion EPM Architect との統合	oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection
E-Business Suite General Ledger との統合	oracle/wss_username_token_service_policy
Oracle Fusion Accounting Hub との統合	oracle/wss_saml_or_username_token_service_policy
ワークフロー開発キット	oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection
カスタム API プログラムまたは統合	次のいずれかです: <ul style="list-style-type: none"><li>● oracle/wss11_saml_or_username_token_with_message_protection</li><li>● oracle/wss_username_token_service_policy</li><li>● oracle/wss_saml_or_username_token_service_policy</li><li>● oracle/wss_http_token_service_policy</li></ul>

詳細は、次を参照してください:

- [Oracle Web Services Manager でのポリシーの構成](#)
- [SSL 用の Data Relationship Management API アダプタの構成](#)

『Oracle Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』の Web サービスへのポリシーの添付に関する項を参照してください。

## Oracle Web Services Manager でのポリシーの構成

Oracle Web Services Manager で Data Relationship Management Web サービスのポリシーを構成するには、『Oracle Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』のポリシーの構成に関する項を参照してください。

メッセージ保護を使用する Web サービス・セキュリティ・ポリシーを構成する場合、キーストアを暗号化に使用するように構成する必要があります。キーストアを構成するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のメッセージ保護用のキーストアの設定に関する項を参照してください。

# SSL 用の Data Relationship Management API アダプタの構成(オプション)

Data Relationship Management Web サービスでは、API アダプタを使用して Data Relationship Management サーバーと通信します。

▶ SSL 用の Data Relationship Management API アダプタを構成するには:

- 1 SSL 証明書をインストールして API アダプタ・ポートをその証明書にマップします。

**注:** Data Relationship Management API アダプタでは、Windows Communication Foundation (WCF)を使用します。WCF および証明書の使用方法の詳細は、<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms731899%28v=VS.90%29.aspx> を参照してください。

1. SSL 証明書を取得します。本番環境では、信頼できる認証局ベンダーから証明書を取得する必要があります。テスト環境では、Windows MakeCert ユーティリティを使用して自己署名証明書を生成できます。
2. MMC スナップインを使用して、信頼できるルート認証局ストアに証明書をインポートします。
3. 証明書から拇印値を取得します。
4. SSL 証明書を使用して API アダプタ(WCF)ポートを構成します。手順については、<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms733791%28v=VS.90%29.aspx> を参照してください。

**注:** API アダプタのデフォルト・ポートは 5240 です。

- 2 HTTPS / SSL 用の API アダプタを構成します。SSL を有効化するには、Data Relationship Management 構成コンソールの「API アダプタ・ホスト」タブで、証明書名を入力します。
- 3 テストを行って HTTPS/SSL が動作していることを確認します。

1. 前述の変更が完了したら、Data Relationship Management サービスを再起動します。これは、Data Relationship Management 構成コンソールから実行できます。
2. Web ブラウザから、`https://drm host name:5240/Oracle/Drm/APIAdapter?wsdl` という URL を使用して Data Relationship Management API アダプタの WSDL にアクセスします(drm host name は、Data Relationship Management サーバーが実行されているコンピュータの名前です)。

**注:** プロトコルは `http` ではなく `https` です。`http` プロトコルは、HTTPS/SSL が無効の場合に `wsdl` にアクセスするために使用できます。

# Oracle Enterprise Manager を使用した Data Relationship Management Web サービスのテスト

▶ Oracle Enterprise Manager を使用して Web サービスをテストするには:

- 1 Data Relationship Management Web サービスに Oracle Web Services Manager セキュリティ・ポリシーが添付されていることを確認します。ローカルまたはグローバル・ポリシーを添付できます。

例: oracle/wss\_username\_token\_service\_policy

**注:** Data Relationship Management Web サービスに同時に添付できるポリシーは、1つのみです。

**注:** セキュリティ・ポリシーを変更したら、状況により Data Relationship Management Web サービスが配置されている WebLogic ターゲット・サーバーを再起動する必要があります。

- 2 Enterprise Manager で、Data Relationship Management Web サービスの配置先のドメインを選択して、ドメイン・コンテキスト・メニューまたは右ペインの「WebLogic ドメイン」メニューから「Web サービス」>「Web サービスのテスト」を選択します。

- 3 「WSDL」テキスト・ボックスに Data Relationship Management Web サービスの WSDL を入力します。

例: `http://localhost:28080/oracle-epm-drm-webservices/DrmService?wsdl`

- 4 「操作」から、getSysPrefs などの操作を選択します。

- 5 「リクエスト」タブで、「WSS ユーザー名トークン」を選択し、認証で使用するユーザー名とパスワードを入力します。

**注:** ユーザーは、WebLogic ドメインのセキュリティ・レルム内および Shared Services 内に存在する必要があります。

- 6 「引数の入力」を展開し、ドロップダウン・リストから「XML 表示」を選択して、"`<soap:Body xmlns:ns1="http://drm.webservices.epm.oracle">`" タグの前に(フォーマットされたとおりに正確に)次の SOAP ヘッダー引数を貼り付けます:

**注:** 次の引数をコピーする場合、タグや要素間に改行または空白を挿入しないでください。

```
<soap:Header>
<AppParameters xmlns="http://drm.webservices.epm.oracle">
<serverUrl xmlns="http://drm.webservices.epm.oracle">http://localhost:5240/Oracle/
Drm/APIAdapter</serverUrl>
<sessionParams xmlns="http://drm.webservices.epm.oracle">ProductVersion=11.1.
```

```

2,CultureName=en-US,TimeZoneOffset=-360</sessionParams>
</AppParameters>
</soap:Header>

```

**注：** 選択した Data Relationship Management 操作の必須パラメータを移入する  
必要があり、そうしないとエラーが発生します。

- 7 手順 6 の SOAP ヘッダー引数で、serverUrl を、Data Relationship Management API アダプタの適切なホスト名およびポートに変更します。
- 8 「Web サービスのテスト」をクリックします。

**注：** 成功すると、「レスポンス」タブに Web サービスからの応答が表示されます。失敗すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 9 テストの完了後、必要な本番ポリシーを再添付します。

## トラブルシューティング

エラー	考えられる原因	推奨事項
要求における Oracle EPM Foundation エージェント・エラー: セッションの開始(メッセージ: セッションを開始できません。EPMCSS-00301: ユーザーの認証に失敗しました。ログイン情報が無効です。有効なログイン情報を入力してください)。	Shared Services にユーザー ID が含まれません。	Data Relationship Management が、WebLogic レルムで使用されているものと同じユーザー・ディレクトリで構成されていることを確認します。
javax.xml.ws.soap.SOAPFaultException: FailedAuthentication : セキュリティ・トークンを認証できません。	ユーザー ID が WebLogic セキュリティ・レルムに存在しません。	レルムの適切な認証プロバイダで WebLogic レルムを構成します。Shared Services の構成で使用したものと同一プロバイダを指し示すように構成されていることを確認します。
javax.xml.ws.WebServiceException: 次の場所で WSDL へのアクセスに失敗しました: http://localhost:7001/oracle-epm-drm-webservices/DrmService?WSDL。	ホストまたはポートが間違っています。  Web サービスが WebLogic ドメインで実行されていません。	Data Relationship Management Web サービスが配置され、WebLogic ドメインで実行されていることを確認します。  WSDL URL のホストまたはポート参照を変更します。
次の場所における DRM API アダプタとの通信試行中のエラー: http://localhost:5240/Oracle/Drm/APIAdapter/。	ホストまたはポートが間違っています。  API アダプタが実行されていないか、適切に構成されていません。	API アダプタが構成され、実行されていることを確認します。  クライアント・プログラムまたはアプリケーションの API アダプタ URL を正しい値に変更します。

エラー	考えられる原因	推奨事項
<p>javax.xml.ws.soap.SOAPFaultException: SOAP でエラーを認識する必要があります:{http://docs.oasis-open.org/wss/2004/01/oasis-200401-wss-wssecurity-secext-1.0.xsd}Security, {http://docs.oasis-open.org/wss/2004/01/oasis-200401-wss-wssecurity-secext-1.0.xsd}Security.</p>	<p>OWSM ポリシーが Data Relationship Management Web サービスに添付されていないか、ポリシーが存在する場合はポリシーが無効です。</p> <p>OWSM が適切に構成されておらず、動作していません。サブレットにアクセス可能で、Policy Manager のステータスが動作中であることを確認します。</p> <p><code>http://&lt;host&gt;:&lt;port&gt;/wsm-pm/validator</code></p>	<p>グローバルまたはローカル・ポリシーを Data Relationship Management Web サービスに添付します。</p> <p>次の OWSM のトラブルシューティングに関する項の手順に従ってください。</p> <p><a href="http://download.oracle.com/docs/cd/E12839_01/web.1111/b32511/diagnosing.htm#CHDIDCHA">http://download.oracle.com/docs/cd/E12839_01/web.1111/b32511/diagnosing.htm#CHDIDCHA</a></p>

# 4

## Data Relationship Managementインストールのアップグレード

### この章の内容

サポートされるアップグレード・パス.....	55
アップグレード・チェックリスト.....	57
既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード.....	58
アプリケーションへの更新の適用.....	68
手動アップグレード・タスク.....	69

アップグレードは、新しいソフトウェア・リリースを配置し、以前の配置から新しい配置にアプリケーションおよびデータを移動するプロセスです。

「データ分析」および「データ変換」を参照して、アップグレード中にデータがどのように影響を受けるかを完全に理解することが重要です。

## サポートされるアップグレード・パス

次のリリースから、このリリースの Data Relationship Management にアップグレードできます:

- 9.2.x
- 9.3.x
- 11.1.x

**注:** リリース 11.1.2 からアップグレードする場合、このリリースを以前のリリースに対してインストールしてください。11.1.2 より前のリリースからアップグレードする場合、最初に古いリリースを手動でアンインストールしてから新しいリリースをインストールする必要があります。

Data Relationship Management 構成コンソールのリポジトリ・ウィザードによって、以前のリリースから Data Relationship Management リポジトリをアップグレードするための様々なオプションが提供されます。また、ウィザードを使用して、現在のリリースのリポジトリを、同じかまたは異なるデータベース・プロバイダ上で実行されている別のリポジトリにコピーできます。

後続の項では、リポジトリをアップグレードまたはコピーする場合の高度なオプションについて説明します:

- 9.2.x、9.3.x および 11.1.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス

- 11.1.2.0.x および 11.1.2.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス
- 11.1.2.2 のリポジトリ・コピー・パス

詳細な手順は、58 ページの「既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード」を参照してください。

## 9.2.x、9.3.x および 11.1.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス

- アップグレード・パスのオプション 1:
  - 「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。
- アップグレード・パスのオプション 2:
  1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成 SQL スクリプトを手動で実行します。
  2. ターゲット接続として手順 1 で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。

## 11.1.2.0.x および 11.1.2.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス

- アップグレード・パスのオプション 1:
  - 「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。
- アップグレード・パスのオプション 2:
  1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成 SQL スクリプトを手動で実行します。
  2. ターゲット接続として手順 1 で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。
- アップグレード・パスのオプション 3:
  1. 新しいアプリケーションを追加して、既存の 11.1.2.0.x または 11.1.2.1.x リポジトリのリポジトリ接続情報を指定します。
  2. アプリケーションに対して「更新の適用」を実行します。

## 11.1.2.2 のリポジトリ・コピー・パス

- コピー・パスのオプション 1:
  - 「新規リポジトリの作成」および「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを同時に実行します。



**注：** 現在のリリースのリポジトリの異なるコピー方法に関する重要な情報は、リポジトリ・ウィザードの「ソース接続」ページにある説明を参照してください。

- コピー・パスのオプション 2:
  1. 「新規リポジトリの作成」オプションを実行するか、リポジトリ作成 SQL スクリプトを手動で実行します。
  2. ターゲット接続として手順 1 で作成した新規リポジトリを使用し、「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」オプションを実行します。

## アップグレード・チェックリスト

次の表に、Data Relationship Management をアップグレードするために実行するタスクの概要を示します。

**表 2** アップグレード・チェックリスト

タスク	参照先
<p>1. このリリースの互換性、システム要件、およびその他の前提条件を確認します。</p> <p>データベース環境がアップグレードを必要とする場合、次に進む前にデータベースのアップグレードを実行します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。</p> <p><b>注：</b> Shared Services を使用する場合、Data Relationship Management をアップグレードする前に Oracle Hyperion Shared Services インストールをアップグレードする必要があります。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide を参照してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <a href="#">9 ページの「インストールの前提条件」</a></li> <li>● Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックス(<a href="http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html">http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html</a>)</li> <li>● 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』</li> </ul>
2. 以前のリリースをバックアップします。	アップグレードを続ける前に、データベース、アプリケーションおよびその他のファイルを含む前のリリースの情報を必ずバックアップしてください。
3. インストール・ファイルをダウンロードし、準備します。	このリリースのファイルをダウンロードして ZIP ファイルの内容を抽出します。
4. Data Relationship Management サービスを停止します。	以前のリリースのインストールと同じマシンにこのリリースをインストールする場合、Data Relationship Management サービスを停止します。
5. 以前のリリースの Data Relationship Management をアンインストールします。	<p>リリース 11.1.2 からアップグレードする場合、以前のリリースをアンインストールする必要はありません。以前のリリースに対してこのリリースをインストールしてください。</p> <p>11.1.2 より前のリリースからアップグレードする場合、最初に古いリリースを手動でアンインストールしてから新しいリリースをインストールする必要があります。</p>
6. このリリースの Data Relationship Management をインストールします。	<a href="#">20 ページの「Data Relationship Management のインストール」</a>

タスク	参照先
7. Data Relationship Management を構成します。	Data Relationship Management 構成コンソールを使用して新しいインストールを構成します。58 ページの「 <a href="#">既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード</a> 」を参照してください。
<p>8. この Data Relationship Management リリースに対して Web サービスを再配置します。</p> <p><b>注：</b> 11.1.2.1 より前のリリースから Web サービスをアップグレードする場合、WebLogic コンソールを使用して Web サービスの DrmWebService を配置解除する必要があります。</p> <p>Web サービスを配置解除する方法の詳細は、『Oracle Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド』を参照してください。</p>	WebLogic の Web サービス・アプリケーションの名前は、デフォルトで oracle-epm-drm-webservices になります。
9. オプション: Web サービスをデプロイおよび構成します。	<a href="#">Data Relationship Management Web サービス API の配置および構成</a>
10. Data Relationship Management サービスを開始します。	

## 既存の Data Relationship Management アプリケーションのアップグレード

既存のすべてのアプリケーションのリポジトリ情報を更新する必要があります。以前の Data Relationship Management リリースからアプリケーションをアップグレードしたり、現在のリリースからアプリケーションをコピーできます。

**注：** 次の手順は、一般的なアップグレード・パスを示しています。アップグレードには複数のパスが存在するため、次の手順のすべてを適用できないアップグレード・パスもあります。

リリース固有のアップグレードおよびコピー情報は、56 ページの「[9.2.x、9.3.x および 11.1.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス](#)」、56 ページの「[11.1.2.0.x および 11.1.2.1.x のリポジトリ・アップグレード・パス](#)」および 56 ページの「[11.1.2.2 のリポジトリ・コピー・パス](#)」を参照してください。

詳細は、次を参照してください:

- [データ分析](#)
- [外部接続の使用](#)
- [データ変換](#)
- [派生プロパティ参照によるプロパティのアップグレード](#)

▶ 既存の Data Relationship Management アプリケーションをアップグレードするには:

- 1 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。
- 2 アップグレードするアプリケーションを選択するか、アップグレードする新規アプリケーションを追加します。

**注:** Data Relationship Management サービスを開始する前に、既存のすべてのアプリケーションに関するリポジトリ情報を更新する必要があります。

3 「リポジトリ構成」タブで、「リポジトリ・ウィザード」をクリックします。

4 次のオプションを選択して「次」をクリックします:

- 「新規リポジトリの作成」
- 「既存のリポジトリのコピーまたはアップグレード」

5 「ソース接続」ページで、次の手順を実行します。

1. データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
2. ソース・リポジトリへの接続を入力します。これは、データのコピー元のデータベースです。このデータベースでは何も変更されません。
3. このデータベースからの読取りが可能なユーザーのユーザー ID およびパスワードを入力します。
4. **オプション:** 「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は 60 秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラーを生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は 900 秒です。

---

**注意** Data Relationship Management テーブルスペースのデータ・ファイルの作成中にタイムアウトが発生しないようにするため、「コマンドのタイムアウト」は 0 (ゼロ) に設定してタイムアウト値を使用しないでください。

---

5. 「接続のテスト」をクリックします。

6 「次」をクリックします。

7 「ターゲット接続」ページで、次の手順を実行します。

- データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
- アップグレードされたリポジトリが存在するターゲット・データベースへの接続を入力します。
- データベース・スキーマおよびデータ・ファイルを作成する権限を持つ管理者のユーザー ID およびパスワードを入力します。
- **オプション:** 「接続のタイムアウト」には、試行を取り消してエラーを生成するまでに接続が開くのを待機する秒数を入力します。デフォルト値は 60 秒です。「コマンドのタイムアウト」には、コマンドを取り消してエラー

を生成するまでにコマンドの実行を待機する秒数を入力します。デフォルト値は 900 秒です。

**注：** タイムアウト値をゼロに設定すると、タイムアウトは使用されません。これらの設定は `drm-config.xml` に保存され、エンジンによって起動時に使用されます。大規模操作(大規模なバージョンの削除など)を実行するには、「コマンドのタイムアウト」をデフォルトより大きい値に設定します。

---

**注意** Data Relationship Management テーブルスペースのデータ・ファイルの作成中にタイムアウトが発生しないようにするため、「コマンドのタイムアウト」は 0 (ゼロ)に設定してタイムアウト値を使用しないでください。

---

- 「接続のテスト」をクリックします。

8 「次」をクリックします。

9 「リポジトリの分析」画面で、次の設定を確認して変更します。

- 「バージョン」 - アップグレードするバージョンを選択し、アップグレードに含めないバージョンを選択解除します。
- 「エクスポート」 - アップグレードするエクスポートのファイル接続、データベース接続および組込み接続を設定します。画面の最上部ですべてのエクスポートを変更するか、個々のエクスポートを変更します。
- 「ブック」 - アップグレードするブックの前ファイル接続、後ファイル接続および結合ファイル接続を設定します。画面の最上部ですべてのブックを変更するか、個々のブックを変更します。
- 「インポート」 - アップグレードするインポートのインポート・ファイル接続を設定します。画面の最上部ですべてのインポートを変更するか、個々のインポートを変更します。
- 「無効なプロパティ参照」 - これらのプロパティ参照は、無効であり、アップグレード後に予期しない動作が発生する可能性があります。

**注：** これらのオブジェクトとアップグレード中のデータ変換の動作方法の詳細は、[62 ページの「データ分析」](#) および [65 ページの「データ変換」](#) を参照してください。

10 「次」をクリックします。

11 次のいずれかの操作を行います：

- Oracle Database の場合、次の手順に進んでください。
- SQL Server データベースの場合、[30 ページの「SQL Server データベースの作成」](#)に進んでください。

12 「リポジトリ・ユーザーとデータ・ファイル設定」ページで、Data Relationship Management リポジトリのスキーマ所有者として作成するユーザー ID およびパスワードを入力します。

- 13 デフォルト・テーブルスペース設定を受け入れるか、変更を加えて「次」をクリックします。リポジトリのデフォルト・サイズの詳細は、62 ページの「データ分析」を参照してください。

**注：** データ、インデックス、トランザクションおよびプロパティには専用のテーブルスペースを使用することを強くお勧めします。デフォルト・テーブルスペースの名前は、すでに使用中である可能性があり、新しいテーブルスペースの名前を指定しない場合は再利用されます。

- 14 「アプリケーション管理者の作成」ページで、管理者ユーザーのパスワードを入力して「次」をクリックします。

**注：** デフォルト管理者ユーザーは ADMIN ですが、デフォルト管理者ユーザーを変更することもできます。

---

**注意** 11.1.2.x アプリケーションをアップグレードする場合、既存の ADMIN ユーザーのパスワードはここで入力したパスワードによって上書きされません。

---

- 15 「リポジトリ確認の作成」ページで、設定を確認して「次」をクリックし、作成プロセスを開始します。

データベースが作成されると、成功メッセージが表示されます。

- 16 「次」をクリックします。

- 17 「リポジトリ確認のコピー」ページで、設定を確認して「次」をクリックし、コピー・プロセスを開始します。

データベースがコピーされると、成功メッセージが表示されます。

- 18 「次」をクリックします。

**ヒント：** リポジトリの作成、コピーおよびアップグレードの情報は、リポジトリ・ウィザードのログに書き込まれます。ウィザードの「リポジトリの操作の完了」ページの「ログの保存」をクリックし、ログ・ファイルを保存します。

- 19 「リポジトリの操作の完了」画面で、「終了」をクリックします。

設定を確認できるコンソールのメイン画面に戻ります。

- 20 「構成の保存」をクリックします(そうしない場合、コンソールの終了時に接続情報が失われます)。

追加のアプリケーション構成タスクについては、次を参照してください:

- [ホスト・コンピュータの構成](#)
- [認証設定の構成](#)
- [構成設定の保存およびサービスの開始](#)

## データ分析

「リポジトリの分析」ページには、新しいリポジトリのサイズとオブジェクトに影響する決定を行うことができるように、ソース・リポジトリの情報が含まれます。「分析の要約」セクションには、分析の概要が含まれます。スペース要件は、異なるセグメントに分割され、ユーザーが新しいリポジトリのスペース要件を理解しやすいように概要が示されます。ここに示されるサイズは、計算されたスペース要件が Oracle リポジトリの各デフォルト・テーブルスペースで 200MB を超える場合、または SQL Server リポジトリのデータおよびログ・ファイルで 5MB を超える場合、リポジトリ・ユーザーおよびデータ・ファイルの設定ページに自動的に適用されます。「オブジェクト分析」セクションには、アップグレードを処理する前に対応する必要がある未解決の問題が表示されます。

- **バージョン** - バージョンが表示され、アップグレードに含めないバージョンを選択解除できます。バージョンを選択解除すると、「要約」セクションのスペース値とカウント値に影響します。
- **エクスポート** - 特別な注意が必要なエクスポートが表示されます。結果や他の外部ファイルの外部接続が必要なエクスポートは、ここに含まれます。カスタム・エクスポートなど、サポートされなくなったエクスポートもここに含まれます。外部接続が提供されていない場合、エクスポートはクライアント・ファイル・エクスポートとして構成されます。外部接続の詳細は、[63 ページの「外部接続の使用」](#)を参照してください。
- **ブック** - 結合ファイル、前ファイルおよび後ファイルの外部接続が必要なブックが表示されます。外部接続が提供されていない場合、エクスポートは結合ファイルを使用せずに構成されます。外部接続の詳細は、[63 ページの「外部接続の使用」](#)を参照してください。
- **インポート** - 入力ファイルの外部接続が必要なインポートが表示されます。外部接続が指定されていない場合、インポートはクライアント入力ファイルを使用して構成されます。外部接続の詳細は、[63 ページの「外部接続の使用」](#)を参照してください。
- **無効なプロパティ参照** - Data Relationship Management システムで予期しない動作を発生させる可能性のあるプロパティ参照が表示されます。これらの無効な参照は、通常、Data Relationship Management データベースを直接更新することによってのみ発生します。次のシナリオがここに含まれます。

次の2つのシナリオでは、リポジトリの分析中にプロパティ定義にフラグが設定され、参照されなくなったデータ値は破棄されたとみなされます。11.1.1.x ソースをアップグレードする場合、破棄されたレコードは新しいリポジトリにコピーされません。11.1.2.x ソースをアップグレードすると、破棄されたレコードは新しいリポジトリにコピーされますが、Web クライアント UI には表示されず、Data Relationship Management サービスの開始時にアプリケーション・コントローラの Windows イベント・ビューア・アプリケーションのログに警告が表示されます。

- Property\_Local または RM\_Node\_Prop\_Local テーブルのローカル・プロパティとして参照されているグローバル・プロパティ。
- Property\_Global または RM\_Node\_Prop\_Global テーブルのグローバル・プロパティとして参照されているローカル・プロパティ。



たとえば、11.1.1.x Property\_Local テーブルのレコードは、現在グローバルとして設定されているプロパティ定義ではコピーされません。同様に、11.1.1.x Property\_Global テーブルのレコードは、現在ローカルとして設定されているプロパティ定義ではコピーされません。

次のシナリオでは、リポジトリの分析中に、ユーザーのみに警告するようにプロパティ定義にフラグが設定されます。プロパティ定義は、ソース・データベースに存在しますが、有効性を確認する必要があるため、アップグレードされたデータベースにコピーされません。

- ローカル・プロパティを参照する派生パラメータを含む派生グローバル・プロパティ
- 次の式メソッドのいずれかでローカル・プロパティを参照する式を含むグローバル式プロパティ:
  - IsRangeListSubset
  - NodePropValue
  - OrigPropValue
  - ParentPropValue
  - PropControllingHier
  - PropMaxValue
  - PropMinValue
  - PropValue
  - RangeListContains
  - ReplacePropValue
  - Stuff
- 検索プロパティとしてローカル・プロパティを指し示すグローバル検索プロパティ


## 外部接続の使用

外部接続は、サーバー・ファイルの場所、FTP の場所およびデータベース・テーブルにアクセスするために使用されます。デフォルト接続を作成および適用可能で、個別に接続を適用できます。ファイル接続は、作成後、ファイル接続を必要とする任意のオブジェクトから参照できます。たとえば、エクスポートの接続を作成すると、その接続はインポート・セクションでも使用できます。複数選択して適用することも、すべて選択して適用することもできます。



詳細は、次を参照してください:

- [外部接続の作成](#)
- [外部接続の適用](#)



## 外部接続の作成

分析の特定の行で、または「ファイル接続」フィールドの分析画面の最上部で、外部接続を作成できます。どちらの場所でも、をクリックして接続の作成ダイアログ・ボックスを開きます。行レベルで外部接続を作成すると、接続は自動的に行に適用されます。


▶ サーバー・ファイルへの外部接続を作成するには:


- 1 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
- 2 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。
- 3 「接続タイプ」で、「サーバー・ファイル」を選択します。
- 4 サーバー・ファイルへの UNC パスを入力します。をクリックしてサーバー接続をテストします。
- 5 「OK」をクリックします。


▶ FTP ファイルへの外部接続を作成するには:

- 1 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
- 2 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。
- 3 「接続タイプ」で、「FTP」を選択します。
- 4 ホスト・サーバーを入力します。をクリックしてサーバー接続をテストします。
- 5 サーバーの有効なユーザー ID およびパスワードを入力します。
- 6 「OK」をクリックします。

▶ データベース・テーブルへの外部接続を作成するには:

- 1 「ファイル接続」フィールドで、をクリックします。
- 2 接続の名前を入力し、オプションで説明を入力します。
- 3 データベース・プロバイダを選択します(「Oracle」または「SQL Server」)。
- 4 データベース・サーバーへの接続文字列を入力します。
- 5 サーバーのユーザー ID およびパスワードを入力します。

注: をクリックすると、データベースへの接続をテストできます。


- 6 をクリックしてデータベース・テーブルをロードします。
- 7 外部接続のためのデータベース・テーブルを選択します。
- 8 「OK」をクリックします。



## 外部接続の適用

**注：** 行レベルで外部接続を作成すると、接続は自動的に行に適用されます。詳細は、64 ページの「外部接続の作成」を参照してください。

▶ オブジェクトに外部接続を適用するには:

- 1 「ファイル接続」フィールドで、をクリックし、適用する外部接続を選択します。
- 2 外部接続を適用する行を選択します。

**注：** 「[Shift]+クリック」および「[Alt]+クリック」を使用して、複数の行を選択できます。選択した外部接続をすべての行に適用するには、「すべて選択」をクリックします。

## データ変換

次の項では、アップグレードの中にデータを変換する方法について説明します:

- ユーザー
- トランザクション
- エクスポート
- インポート
- 外部接続
- プロパティ

### ユーザー

ADMIN ユーザーに割り当てられた役割は、すべてのロールに再設定されます。また、パスワード有効期限日は、現在の日付にシステム・プリファレンスで設定された期間を加えた日付に再設定されます。

---

**注意** 11.1.2.x アプリケーションをアップグレードする場合、既存の ADMIN ユーザーのパスワードはここで入力したパスワードによって上書きされません。

---

Data Relationship Management のアップグレード・プロセスでは、次のユーザー・タイプ・マッピングを使用します:

古いユーザー・タイプ	割り当てられた機能役割
システム	アクセス・マネージャ アプリケーション管理者 データ・マネージャ ワークフロー・ユーザー
機能	データ・マネージャ ワークフロー・ユーザー
セキュリティ	アクセス・マネージャ
ユーザー	インタラクティブ・ユーザー ワークフロー・ユーザー

## トランザクション

- Data Relationship Management のユーザー・インタフェースには、ユーザーのセッションに応じたローカル時間およびフォーマットで日付と時刻が表示されます。11.1.2 より前のリリースのタイムスタンプ値を変換する場合、次のルールが適用されます。
  - タイムスタンプは、Data Relationship Management 構成コンソールが実行されているタイムゾーンのオフセットを使用して UTC に変換されます。11.1.2 より前のリリースのソース・データが書き込まれたタイムゾーンとは異なるタイムゾーンでコンソールが実行されている場合、変換後の日時は前後に 1 時間以上ずれる可能性があります。
  - 11.1.2 より前のリリースでは、夏時間が一貫して適用されていたわけではないため、すべてのトランザクション日付は、Data Relationship Management 構成コンソールが実行されているタイムゾーンによって指定される適切なオフセットを使用して変換されます。日付がコンソールのタイムゾーンの標準期間に含まれる場合、標準の UTC オフセットが適用されます。日付がコンソールのタイムゾーンの夏時間に含まれる場合、夏時間の UTC オフセットが適用されます。たとえば、東部タイムゾーンでは、標準の UTC オフセットは-5 時間ですが、夏時間中はオフセットが-4 時間になります。リポジトリのアップグレード後に追加されたすべての新規データについても、格納日付は標準および夏時間の適切な UTC オフセットを反映しています。
- ソース・リポジトリの削除されたバージョンのトランザクション・レコードは、ターゲット・リポジトリにコピーされないため、コピーされたトランザクション履歴レコードの数は、ターゲット RM\_Transaction テーブルの行数に一致しない可能性があります。
- バージョンを選択解除すると、それらのバージョンに属するトランザクションはコピーされません。

「エクスポート実行」トランザクション・タイプでは、プロパティの略称フィールドではなく「オブジェクト名」フィールドにエクスポート名が格納されます。

Data Relationship Management のアップグレード・プロセスでは、次のトランザクション名マッピングを使用します:

古いトランザクション名	新しいトランザクション名
オートメーター実行	アクション・スクリプト実行
抽出の移行	エクスポートの移行
ロードの移行	インポートの移行
システム・カテゴリの追加	管理者の階層グループの追加
システム・カテゴリの更新	管理者の階層グループの更新
システム・カテゴリの削除	管理者の階層グループの削除

## エクスポート

次の項では、エクスポートのアップグレード方法について説明します:

### プレビューのエクスポート

プレビューの出力モードが含まれるエクスポートは、クライアント・ファイル・ターゲット・デバイスに直接移行されます。

### データベースのエクスポート

データベースのエクスポートを使用するには、新しい外部接続を作成するために、更新されたデータベース接続情報が必要です。データベースのエクスポートごとに接続情報を指定して、新しい外部接続を簡単に作成できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、エクスポートのデータベース・パラメータ情報は保持および移行されますが、出力モードはエクスポートが機能するように「クライアント・ファイル」に設定されます。システムが起動して実行中になったら、新しい接続を作成し、エクスポートを構成してそれらを使用できます。

### ファイルのエクスポート

このリリースより前のシステムにおけるファイルの場所は、クライアントのコンテキストで構成されます。新しいシステムは Web アプリケーションであるため、エクスポートでは、サーバーのコンテキストに基づいてファイルを生成する必要があります。ファイル出力モードでのエクスポートの場合、アップグレード・プロセスによってファイルの場所の情報が提供され、UNC パスにマップされる新しい外部接続を簡単に使用できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、ファイル名は保持および移行されますが、エクスポートの出力モードは「クライアント・ファイル」に設定されます。アップグレード・プロセスの後に、適切な外部接続を作成し、エクスポートを構成してそれを使用できます。

### 祖先のエクスポート

祖先のエクスポートは、適切な設定を持つ世代のエクスポートに変換され、元の祖先のエクスポートと同等の結果が返されます。

## エクスポート・ブック

ファイル情報を含むエクスポート・ブックは、ファイルのエクスポートとほぼ同じように扱われます。アップグレード・プロセス中に、ブックの結合ファイル、前ファイルおよび後ファイルで使用する外部接続を作成できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、ブックはクライアント・ファイルに出力するように設定されます。

## インポート

このリリースより前のシステムでは、ユーザーは、インポート・ファイルの場所およびログ・ファイルの場所をクライアント・アプリケーションのコンテキストで保存できました。このリリースでは、外部接続を使用してサーバーのコンテキストでファイルの場所を保存するか、実行時にローカル・ファイルを選択できるようにインポートを保存できます。アップグレード・プロセス中に、新しい外部接続を作成するために使用される接続情報を指定できます。アップグレード・プロセス中にこの手順をスキップする場合、インポートでは、実行時にローカル・インポート・ファイルを選択する必要があります。ログ・ファイルは、ファイルに保存されなくなりました。インポートの結果は、ページに表示され、必要に応じて結果をダウンロードできます。

## 外部接続

分析ページで追加された外部接続は、新しいデータベースに挿入され、それらが選択されているメタデータ・オブジェクトによって参照されます。

## プロパティ

Data Relationship Management 11.1.2.1 リリースでは、プロパティ定義のネームスペースが導入されました。11.1.2.1 より前のアプリケーションのアップグレード・プロセスは、適切なネームスペース接頭辞(ユーザー定義プロパティの場合は Custom、システム定義プロパティの場合は Core)を使用するように、明示的なプロパティ名の参照を使用して派生プロパティ式を自動的に変換します。

# アプリケーションへの更新の適用

▶ 既存の 11.1.2.x リポジトリに更新を適用するには:

- 1 新規アプリケーションが作成されます。
- 2 「リポジトリ構成」タブで、既存の 11.1.2.x リポジトリ用のリポジトリ接続情報を指定します。
- 3 「アプリケーション」リストからアプリケーションを選択します。
- 4 「アプリケーション」メニューから、「更新の適用」を選択します。

**注:** 「更新の適用」オプションは、11.1.2.0.x より前のリリースには使用できません。

## 手動アップグレード・タスク

### 派生プロパティ参照によるプロパティのアップグレード

実行時に他のプロパティの値に基づいて計算されたプロパティ名を参照する 11.1.2.1 より前のアプリケーションの派生プロパティ式の場合、式を手動で編集し、Concat 関数を使用してネームスペース接頭辞(Custom または Core)を挿入する必要があります。参照されるプロパティ名はノードの式の評価中にのみ計算されるため、アプリケーションのアップグレード・プロセスでは、このような性質の派生プロパティを識別または自動変換できません。

たとえば、アップグレードの前に、MyPropName プロパティから返されるプロパティの値を取得する次の式です:

```
PropValue(PropValue(MyPropName))
```

アップグレードの後に、明示的なプロパティ参照は Custom.MyPropName に更新されます:

```
PropValue(PropValue(Custom.MyPropName))
```

ただし、実行時に Custom.MyPropName プロパティから返される値も、特定のネームスペースで識別される必要があります。外部 PropValue 関数で正しく評価するためには、式を手動で編集して適切なネームスペースを連結する必要があります:

```
PropValue(Concat(Custom., PropValue(Custom.MyPropName)))
```

### バッチ・クライアント・スクリプトのアップグレード

適切な動作を実現するには、次の変更を行って、11.1.2 より前のリリースのバッチ・クライアント・スクリプトを手動でアップグレードする必要があります。

- バッチ・クライアント・プログラム名を `drm-batch-client.exe` に変更します。
- URL を Data Relationship Management アプリケーションに変更します(構成コンソールの「ホスト・マシン」タブにあるプロセス・マネージャの URL を参照)。

バッチ・クライアントのパラメータの詳細は、Oracle Data Relationship Management User's Guide を参照してください。

### API プログラムのアップグレード

11.1.2.1 Web サービス API を使用する API プログラムは、このリリースの Web サービス API と連携するように手動でアップグレードできます。手動でアップグレードするには、プロキシ・クラスを再生成し、プロジェクトを再構築して、以前使用していたメソッドおよびタイプの変更によって発生する可能性のあるビルド・

エラーを解決する必要があります。本番リリース間の API 変更のリストと、Web サービスのプロキシ・クラスを再生成する手順の詳細は、Oracle Data Relationship Management API Guide の 11.1.2.1 API プログラムのアップグレードに関する項を参照してください。

11.1.2 より前の Data Relationship Management リリースと組み合わせて使用する API プログラムは、このリリースで提供されている Web サービス API を使用するように手動で変更する必要があります。Web サービス API に加えられた機能拡張の詳細は、Oracle Data Relationship Management New Features を参照してください。Web サービス API の使用方法の詳細は、Oracle Data Relationship Management API Guide を参照してください。このリリースの Web サービス API で使用可能な操作に 11.1.2 より前の API 操作をマップする方法の詳細は、Oracle Data Relationship Management API Guide の 11.1.2 より前の API プログラムのアップグレードに関する項を参照してください。

# 5

## Data Relationship Managementアプリケーションの監視

Data Relationship Management アプリケーションは、構成コンソールを使用して監視できます。

アプリケーションのステータス情報は、次のタブに存在します:

- 「実行中のプロセス」 - 各プロセスの名前とポート番号、プロセスの開始時間、およびプロセスのメモリーと CPU の使用状況を参照できます。
- 「ロードされたバージョン」 - 各バージョンの名前および各バージョンのエンジンを参照できます。
- 「最近のイベント」 - 最近のアプリケーション・イベント(VersionLoaded、ImportFinished、UpdateUserLogin など)と、各イベントの発生時間を参照できます。
- 「現在のセッション」 - アプリケーションにログインしたユーザーの名前に加え、ログイン時間および最終活動時間を参照できます。

マシンのステータス情報は、次のタブに存在します:

- 「マシン情報」 - マシン名、オペレーティング・システム、バージョン、マシンが実行を開始した時刻、および Data Relationship Management Windows アカウントを参照できます。
- 「実行中のプロセス」 - 各プロセスの名前とポート番号、プロセスの開始時間、およびプロセスのメモリーと CPU の使用状況を参照できます。
- 「Windows イベント・ログ」 - 警告などの最近のイベント、イベントのソースおよびイベント・メッセージを参照できます。

▶ アプリケーションおよびマシンの監視情報を表示するには:

- 1 Oracle Data Relationship Management 構成コンソールを起動するには、「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択します。
- 2 次のいずれかの操作を行います:
  - アプリケーションの監視情報を表示するには、アプリケーションを選択して「アプリケーション・ステータス」タブをクリックします。前述のタブを使用してアプリケーションの情報を表示します。
  - マシンの監視情報を表示するには、アプリケーションを展開してコンピュータ名を選択します。前述のタブを使用してアプリケーションの情報を表示します。

